

# Can You Keep A Secret ?

八神大輔

## 第一話 つぐない

放課後。誰もいない教室で、智也は暇を持て余していた。学際実行委員会から唯笑が戻るのを待っているのだ。

もはや「オロギを集めている振りをする必要はなかったが、かといってほかにすることがあるわけでもない。智也は大きく伸びをして、何度目かのあくびをした。

(こんなときは……やっぱ寝るか)

そう考えて、机に突っ伏そうとしたとき、背後から声がかけられた。

「智也……まだ、いたのか」

「あん……ああ、信か」

振り向くと、そこにはいつの間にか信が立っていた。いつものように笑顔を浮かべているが、どこかに陰がある。過去と現在にけじめをつけた智也にとって、目下、唯一の悩みはその親友の陰りだった。

「唯笑ちゃん、待ってるのか？」

「ああ。毎日毎日、よくこんだけ話し合うネタがあるよな」

「会議なんてそんなもんだろ。……ところで、さ」

薄く笑ったあと、信は真顔になった。智也とは目を合わせずに、言葉を続ける。

「唯笑ちゃんとは、うまくいつてるのか」

「見りゃわかんだろ。……って、それ、もう何回目だよ、信。なんか毎日訊かれてる気がするぞ」

智也は肩をすくめながら立ち上がり、信の顔を見つめた。

やはり信は目をそらしてしまふ。

「そ、そうか？ すまん。やっぱり気になってさ。俺には……」

「『償いをする責任がある』か？ もうその話はよせて云ってるだろ。だいたい、大袈裟だよ、信。たまたまその場に居合わせただけで、どうしてお前がそこまで責任を感じる必要があるか？」

るんだ」

「それは……」

言いよどむ信。

信がたびたび唯笑との仲を尋ねてくるのは、それを取っ掛かりとして何かほかに云いたいことがあるのだろう、ということとは、智也にもわかっていった。しかし、信はいつも曖昧に笑って去ってしまうのだ。智也も振り切ったとはいえ、何度も話題にしたい事柄ではないので、あまり追求する気になれず、話は終わっていた。

しかし、信の今日の様子はいつもと違っていた。拳を握り締め、次の言葉を搾り出そうとしている。じっと待つ智也に向き直り、ついにその目を正面から見返した。

「智也、俺は……俺の、罪は……」

「……信？」

信のただならぬ様子に、思わず智也も息を飲む。

そのとき、教室のドアが静かに開き、涼やかな声が響いた。

「三上くん、こちらでしたか」

「……双海」

振り向くと、詩音が立っていた。このところ笑顔を見せることが多くなっていたのだが、今日は心なし、以前のよう硬い表情をしているように見える。

詩音はそのまま智也たちのところに歩いてきた。

「唯笑さんが、昇降口でお待ちになってますよ」

「……え、ほんとに？ もう会議終わったのかな？」

「そのようです」

「だったら、なんで戻ってこないんだ、あいつ。鞆だっただけなのに……」

「ちようど下で私に会ったからではないでしょうか？ 三上くんは鞆を持ってきてほしいそうです」

「しようがねえなあ。……あ、でも、今は……」

智也が信のほうに向き直る。しかし、間を外されてしまった信は、いつもの笑みを浮かべるだけだった。

「早く行ってやれよ。別にたいした話じゃない」

「……そうか？ じゃあ……悪いな、また今度」

気にはなつたが、ここでこれ以上追求しても、きっと信はしゃべらない。そのことがわかっていたので、智也は唯笑を迎えに行くことにした。

「それじゃ。双海も、ありがとう」

「ごきげんよう」

智也が去り、教室には信と詩音だけが残された。

信がややばつの悪そうな顔をして、詩音に手を上げてその場を去ろうとする。その背中に、詩音の言葉がかけられた。

「何を、云おうとしていたんですか」

「……え？」

思いがけない問いかけに、信は茫然と振り向いた。詩音が真剣な眼差しを注いでくる。

「失礼ですが、お話を聞いてしまいました。智……三上くん、何を云おうとしたのですか」

「それは……」

双海さんには関係ないよ、信はそう答えようとしたのだが。

「彩花さんは、あなたをかばって事故に遭ったということですか」

「……なっ……」

信は石のように動けなくなった。額に冷や汗がにじむのが自分でもわかったが、手を上げてぬぐうこともできない。喉がからからに渴いた。

「ごうして……双海さんがそれを……」

誰も知らないはずの、自分だけの真実。それを、なぜ、転

校生の彼女が知っているのか。

だが、詩音は小さく肩をすくめて答えた。

「初歩的な推理です」

「なに……？」

「ただ事故の現場に居合わせて、何もできなかった……それだけで、そんなに責任を感じるなんて、不自然でしょう？」

三上くんだって大袈裟だとおっしゃっていたではありませんか。……いつまでもそんな調子だと、感づかれてしまいますよ」

そう、あの雨の日に。傘を持たず、雨の中を走って帰っていた信は、信号が赤であることも、トラックが迫っていることも気がつかなかった。ふと振り向いたとき、トラックのライトが間近に迫り

「危ない！」

少女のそんな声が聞こえたのと同時に、突き飛ばされていった。

激しいブレーキの音。

小さな悲鳴。

そして、路上でぐるぐると回る白い傘。

怖くなって、信は逃げた。走ってその場を逃げ出し、今度は、その自分の行為自体が怖くなって、恐る恐る現場に戻った。

そこにはもう少女の姿はなかった。ただ白い傘の前で、自分と同じ年ぐらいの少年が泣き崩れるのを見た……。

「そつだ……俺の……せいで……。いつかきつと……智也や唯笑ちゃんも気づく……。だから……俺は……自分の口で……」

激しい後悔と自責の念で、信の体は震えていた。しかし、詩音はそんな彼を冷たいと云えるような視線で見つめ、きっぱりと云い切った。

「無用です」

「……なんだって……？」

「不必要な感傷だと云っているのです」

はじめ、信はぼかんと口をあけて詩音の言葉を聞いていた。だが、その意味が理解されてくるに連れ、怒りで頭が真っ白になってきた。

やっぱりこいつには感情ってものがないんじゃないのか？

思わず詩音を引っぱたきそうになった右手を、どうにか左手で押さえる。

詩音はその右手を一瞥し、相変わらず冷ややかな口調で続けた。

「殴りたいなら殴ってもかまいません。けれど、余計なことを云うのはやめてください」

「余計なこと？ 本当のことを伝えるのが、どうして余計なことなんだよ!？」

「真実には必ず価値がある。そう、お考えですか？」

「え……？」

逆に問い返されて、信は答えに窮した。

本当のことだから、伝えなければならぬ。確かに信はただそう思い込んでいた。

「その『真実』で、誰が幸せになりますか。傷つく人が増えるだけでしょう？」

「それは……」

「もしあなたが本当にそれを自分の罪だと思っているのなら、一生、自分の胸だけにしまって、それを背負って生きていくべきです。それがあなたにできる唯一の償いなのではないのですか」

「……」

詩音の言葉に衝撃を受け、信は眩暈さえ感じた。思わず智也の席に腰を下ろしてしまう。茫然と虚空を見据えた。

そう、本当はわかっていたのだ。云うべきではないと。だが苦しむ智也と唯笑を見ていて、自責の念に耐えられなくなつた。すべてを告白して、楽になりたかった。あのときと同じように、俺はただ逃げ出したかったんだ……。

こぼこぼ、という何かを注ぐ音がした。信の前に、詩音が魔法瓶のカップを差し出す。紅茶の芳香が信の心に染みだした。

「どうぞ。落ち着きますよ」

「…… 双海さん……」

見上げると、詩音と目が合った。相変わらず、硬い表情をしていたが、その瞳にはどこかいたわりや哀切の色があるような気がした。

「…… ありがとう」

カップを受け取って、口をつける。紅茶は幾分冷めていたが、信には十分、全身を、そして心を温かく満たしてくれるものに思えた。

「稲穂さんの痛みは、稲穂さんにしかわからない。それなのに勝手なことを云っている、ということはわかっています」

「……」

「ただ…… それでも、智…… 三上さんと唯笑さんには、その話をしないでほしいんです。もし、ひとりで抱え込んでいるのがつらければ、私が…… 私でよければ、お話を伺いますから」

「え……？」

「今度こそ茫然と、信は詩音の顔を見つめた。

なぜ、彼女はそこまで……？」

「どうして…… 双海さんは？」

「……」

詩音はすぐに答えず、信からカップを受け取ると魔法瓶を靴にしまった。

そして、小さく微笑んだ。

その笑みを見た瞬間、信は、恋に落ちていたかもしれ

ない。

「私は、もう彼らに傷ついてほしくないだけです」

「双海さん……」

「三上くん、心配してましたよ。『信の様子が变ただけで、隣で見ててなんか変わったことない?』って…… 残念ながら、

私ではお役に立てませんでしたけど」

そう、信と詩音は隣の席同士だが、ほとんど話をすることはない。というか、教室にいたときの詩音は授業中だろうが休み時間だろうが、本を読んでいるのだ。

「あいつが、俺のことを心配？ 気持ち悪っ」

いつもの調子を取り戻して、信がおどけて見せる。

詩音がその様子にまた少し微笑んだとき、教室のドアが再度開かれた。

「……あ、双海、まだいたんだ。なあ、唯笑、いないんだけど？」

智也だった。教室に残っている詩音と信を、不思議そうに見比べる。

「あ、ごめんなさい。時間をお伝えするのを失念していました。5時にお待ちしているそうです」

「ええ？ なんだ、まだ1時間もあるじゃん……って、さっき会議終わったみたいって云わなかったっけ？」

「そうでしたか？ ……私は図書委員の仕事があるので失礼します。ごきげんよう」

動じた様子もなく、丁寧に挨拶をして詩音は教室を出て行った。

智也と信はふたりとも、なんとなく言葉も出せずにその姿を見送ることになった。

智也が頭を振りながら、信のほうに向き直る。

「相変わらずだなあ、彼女。……でも、珍しいな、信と双海ってのは。なんの話してたんだ？」

「……甘い語らいを、他人にべらべらしゃべると思うか？」

「甘い語らいねえ」

そんなことありえるわけがない、と考えていることを全身で表現しつつ、智也は肩をすくめた。そして、真顔になって信の顔を見る。

「なあ、信、さっきの話は……」

「あ、ああ、あれな。実は……」

信もまた、真剣な表情を浮かべる。正面から智也の目を見つめた。

「実は、俺が……」

「……」

「俺が双海さんのことを好きだって云ったら、唯笑ちゃん、怒るかな？」

「……はあ？」

「いや、俺が唯笑ちゃんに告白したのって、ついこないだじゃないか。それですぐほかの女の子が好き、だなんて云い出したら、軽薄な奴とか思われるんじゃないかってな……」

「……軽薄じゃないつもりだったのかよ……」

「なあっ!? お前、それが親友に対して云う言葉かっ？」

信が話をはぐらかしたことは、智也にももちろんわかってきた。

しかし、その様子がここ最近とは違い、「いつもの」信だったので、それ以上追及する気にはならなかった。云うべきことならいつか云ってくれるだろうし、信が云わないほうがいいと判断したのなら、そのほうがいいだろう。

信の迷いが晴れたのなら、それでよかった。しかし、そのきつかけは彼女なんだろうか？

「やっぱり気になるなあ。双海となんの話してたんだよ」

「そいつは何度聞かれても答えられんな。ふたりだけの秘密だ」

「はーん。……ま、いいけど。彼女もお前のこと心配してたしな」

「心配？」

「ああ、最近、様子が変だけど何かあったのかって俺に訊いてきたよ」

「……」

それは、さっき詩音から聞いた話とは全く逆だった。

そうなると、立ち聞きしていたのも、偶然ではあるまい。信の様子がおかしいことに気づいていたから、様子を見に来

たのだ。

その理由が、俺を心配してじゃなくてこのバカのためっていうのが気に入らないけどな。

信はじろつと恨みがましい目で智也を見た。

「な、なんだよ、その目は」

「べつに。じゃあ俺、行くわ」

「へ？ 行くってどこへ」

「決まってるんだろ。図書室さ」

「図書室って……お前、本気なのか？」

「俺はいつだって真剣だぜ、親友！」

ドアのところで振り返り、握りこぶしを掲げる信。

智也も力なく手を振り返した。

「……頑張れよ、親友」

\*

図書室のやや重い扉をゆっくりと開ける。

滅多にこない場所なので、信には中の配置がどうなっているのかさえすぐにはわからなかった。

きよるきよると見回すと、貸し出しカウンターに座っている詩音が見つかった。いつもどおり、熱心に本を読んでいる。信はまっすぐ彼女のもとへ歩いていくと、声をかけた。

「……やあ」

詩音が顔を上げる。先ほどのことなど何もなかったように、表情に変化はない。

「こんにちは」

「……こんにちは。早速来ちゃったけど……ちょっと、話して、いいかな」

「結構ですが……」

読んでいた本に栞を挟んで閉じる。

そして、にっこりと、微笑んだ。

「図書室では、静かにしてくださいね」

その笑顔が、信にとって決定打となった。

## 第二話 告白

そしてまた、放課後。いつもどおり両手に抱えきれないほどの本を持って校門をくぐった詩音は、後ろから大声で呼び止められた。

「おい、詩音ちゃん、待ってくれよー！」

そのまま行き過ぎてしまいたかったが、聞こえない振りをするには、その声は大きすぎた。詩音は軽くため息をついて、眉を寄せながら振り返る。信が慌てて走ってくるのが見えた。

「はあ……はあ……、図書室行ったら……いないんだもんな……。フエントだよ、詩音ちゃん……。」

その様子だと、図書室の窓から詩音が帰ろうとしているのを見つけて、急いで追いかけてきたらしい。

そのことに詩音は感動。するはずもなく、やや迷惑そうに眉をひそめたままだった。

「稲穂さん、何度も申し上げているとおり、私は男の方からそんな風には呼ばれるのは、好きではありません。」

「あ……ああ、ごめん。でもさ、すごいいい名前じゃん、『詩音』って。こう、口にするだけで、こっちも幸せになるような気がするよ。」

再度ため息をつくのと、詩音はもう何も云わずに歩き始めた。慌てて信が隣に並ぶ。

「荷物、持つよ。」

結構です……と詩音が答えるより早く、信は本の山を詩音の手から取り上げてしまう。そうした強引さが、詩音を何より戸惑わせることには気づいていない。

彼は、そんな風にはしなかったのに……つい、詩音はそう考えてしまうのだ。

「……私、稲穂さんのことを見直していたんです。」

「え？」

「失礼ながら申し上げると、はじめはただ軽い人だと思っていました。」

「……。」

がつくりとうなだれる信。

「でも、智……三上くんとのことで苦しんでいる姿を見て……、私は、表面だけしか見ていなかったんだとわかりました。申し訳ありません。」

「詩音ちゃん……。」

一転して、信は満面の笑みを浮かべる。しかし。

「でも、今ではちょっと買いかぶりすぎたかと思っています。」

再び肩を落とす信。そうやって表情が「口」口と変わる信を見て、詩音はつい笑ってしまいそうになるのを一所懸命こらえていたのだが、信には、そのことはわからなかった。

なんとか失地回復しなければ、と信は話題を別のことに持っていく。

「あ、そうだ、お茶飲んで帰らないか？ またいい店、見つけたんだよ。」

「結構です。」

今度はかなりにはべのない様子で、詩音が答える。かえって不機嫌にさせてしまった。

「先日も、その前もそうおっしゃいましたが、散々な紅茶でした。」

「うっ……でも、今度こそ大丈夫だって。俺が保証するよ。」

「それが当てにならないから、お断りしているんです。」

「詩音ちゃん……。」

世にも物悲しい声で信が咳くが、詩音は動じない。

傍から見れば、意外にうまくいっているふたりに見えるの

かもしれない。

「三上くんが教えてくれたお店ならまだマシなのに、そこには行きたくないと言っし……」

「あ、あそこは……なあ……」

その店を智也に教えたのは信だから、当然、信も知っている。しかし、そこは彼の姉が働いている店だ。さすがに女の子を連れて行くのは気が引けた。家に帰って、何を云われるかわからない。

「じゃ、じゃあさ、今度の日曜は暇？」

「日曜……ですか？ 予定はありませんが……」

「じゃあさ、遊びに行こうよ。あ、別にふたりってわけじゃないから。智也や唯笑ちゃんも一緒に」

「三上くん……たちと？」

かすかに詩音の表情が動く。

「そう。遊園地でも行かないかって誘われたんだよ。いいだろ？」

「……でも……私たちが行くと、ご迷惑なのではないですか？」

「へ？ なんて？」

「なぜって……その……邪魔だと……」

詩音がそんな気の回し方をするのは、信には少々意外だった。目を丸くして、少し頬を赤くしてうつむいた詩音を見つめる。だが、すぐに破顔した。

「大丈夫だって。あいつら、そんなの気にしないよ。だいたい、唯笑ちゃんが言い出したんだぜ？」

詩音ちゃん誘ってみなよ。そう云われたことまでは、さすがに信も付け足さなかった。

「みんなと一緒に騒いでるのが楽しいんだろ。智也はともかく、唯笑ちゃんはそういう娘じゃん」

笑顔で詩音の顔を覗き込み、やっと、信は気づいた。

詩音は硬い表情で、唇を噛んでいる。

「……詩音ちゃん？」

「そうですね……」

独り言のように呟く。いつも静かに話す詩音だが、こんなに悲しく聞こえることはなかった。信は言葉を失って、詩音の横顔を見つめた。

「あのふたりは……いつも優しく……、とても、明るくて、あたたかくて……。私には、少し眩しすぎる……。時々、そう思います……」

そして、涙が一粒だけ、詩音の頬を伝って落ちた。

「詩音ちゃん……」

信の呟きに、詩音がはっと我に帰る。慌てて顔を背けた。

「ごめんさい、変なこと云って」

信はしばらく詩音にかける言葉がなかった。気づいてしまったから。いや、はじめから薄々感じてはいたことだ。

「詩音ちゃんは……智也のことが……？」

「ち……違います！」

顔を背けたまま、強く否定する詩音。しかしその震える声が、本当の気持ち明らかにしてしまっていた。

信がそっと詩音の肩に手を置く。詩音はびくっと体を震わせたが、振りほどきはしなかった。

「そっか……」

苦い想いと、詩音へのいたわり、愛しさ……複雑な感情の渦に翻弄されながら、信は勤めて明るい声を出そうとした。

「実は、俺もさ、唯笑ちゃんに振られたばっかなんだよな」

「……え？」

「智也には、お前らをくつつけるための芝居だったって云ったけど、結構マジだったんだぜ。はは……。俺たちって、似た者同士なのかな」

「……」

道化を演じることで、詩音の心を和らげようとしたのだが……、今度もまた、逆効果だった。

詩音は肩に回された手をゆっくりほどき、信の瞳を正面から見つめた。その顔には、能面のように無表情を装っていた



が、隠しようのない怒りがのぞいていた。

「唯笑さんを忘れるために、私に近づいたのですか」

「え……し、詩音ちゃん？」

「私は私です。誰かの代わりじゃない」

吐き捨てるように云うと、詩音は信の手から荷物を奪い、足早に歩き出した。

一瞬、茫然と立ち尽くした信だったが、慌ててあとを追いつ、その腕をつかんだ。

「待って……待ってくれよ、誤解だ、詩音ちゃん」

「離して……！！ もう、結構です！！」

「詩音ちゃん！」

強引に振り向かせ、両肩をつかむ。そのときの信の瞳は、詩音が思わずはっとするほど真剣だった。だが詩音は、唇を噛んで目をそらした。

「俺が好きなのは、詩音ちゃんだ。詩音ちゃんだけだ。詩音ちゃんだから、好きなんだ！ 誰かの代わりじゃない……誰にも代わりなんかできない……！」

「稲穂さん……」

「詩音ちゃんの髪が、詩音ちゃんの瞳が、詩音ちゃんの入れた紅茶が……、俺に冷たいところだって……、ああ、もう！ 全部好きなんだよ！」

ゆっくりと顔を上げる詩音。信の瞳を見つめ、頬を赤く染めて、そして

「人が……見ています」

「……え？」

気がつくのと、行き交う人々がみんなこちらを見ている。立ち止まって眺めている一団もあった。往來で、あんな大きな声で愛の告白をすれば無理もなかった。

「あ……ごめ……」

慌てて詩音の肩から手を離すと、彼女は荷物を広げ、ほとんど駆け足でその場を去った。信も慌ててそのあとを追う。拍手をしている連中もいたようだ。

結局、駅に着くまでふたりは無言だった。改札の前で、たぬらいがちに信がやっと口を開いた。

「その……ごめんな。恥ずかしい思いさせて……」

詩音は無言で定期を取り出す。そして信の顔を見上げて、

微笑んだ。

「嬉しかったです」

「……え……？」

「そんなにも、私のことを想ってくれる人はいなかったから」

「詩音ちゃん……」

そのときの信の様子は、まさに「この世の春」をテーマにした図だっただろう。

「じゃ、じゃあさ、お詫びにやっぱりお茶でも……」

「それはお断りしたはずですよ」

調子付いて誘う信に対して、詩音がびしりと答える。またしてもがっくりと肩を落とす信に、詩音はいたずらっぽく微笑んだ。

「恥ずかしくって、もうしばらくこの辺りのお店には入れませんよ。……その代わり」

「……？」

「日曜には、紅茶を作って持っていきます。本当の紅茶の味、稲穂さんも早く覚えてくださいね」

「詩音ちゃん……」

「ごきげんよう」

頭を下げて、詩音は改札を抜けた。信は茫然とその姿を見送っている。

やがて、詩音がホームにたどり着いた頃、改札の辺りで歓声が上がるのが聞こえた。

肩をすくめて、今度こそ詩音は聞こえない振りをした。

## 第三話 笑顔

昼休み。屋上のベンチに腰掛け、詩音は読書をしていた。久しぶりにひとりきりの静かな時間。それなのに、なかなか本の内容が頭に入らなかつた。同じところを何度か読み返すが、どうしても集中できない。

ほうっとため息をつくると、詩音は本を閉じてしまった。冬の高い空を見上げる。

(私は私です。誰かの代わりじゃない)

どうして、あんなことを云ってしまったんだろう？

あのとき、口をついて出た言葉。胸に沸き起こった、苛立ちと憤りとやるせなさ。

彼がどういう意図で自分に近づいたとしても、そんなことはどうでもよかつたはずだ。彼に興味がないのなら。

そう……彼に、興味がないのなら。

「あれ？ 珍しいね、こんなところで」

物思いにふける詩音に、後ろから声がかけられた。

驚いて振り返ると、そこにはクラスメイトの少女 音羽

がおるがいた。

「……こんにちは」

「こんにちは……って、クラスメイトに学校の中で会って、わざわざそんな挨拶しなくてもいいんじゃないの？」

笑いながらおるが云う。唯笑とは少しタイプの違うその明るさが、詩音にはやや苦手だった。

だが、おるのほうは詩音の気持ちに気づくはずもなく、その隣に腰を下ろした。

「稲穂くんが探してたよ」

「……だから、ここにいます」

「なーるほど。彼も報われないね」

またひとしきりおるが笑う。そんなつもりはないだろうとわかっているが、どうしても詩音は揶揄されているような

気になってしまう。

「ひとりになりたいこともあります」

「……そりゃそうよね。私も、だから、ここに来てるんだし」

「……え……？」

おるの声の調子が変わったことに気づいて、詩音はその横顔を見つめた。

おるは屋上のフェンス越しに、何かを探すようにじっと視線を注いでいる。

その姿は、教室で智也たちと話しているときとは別人のように寂しさを漂わせ、いっそはかなげでさえあった。

「音羽さん……」

「ん？」

しかし、振り向いたときにはもう、いつもの笑顔だった。

私はいつも、ひとの表面しか見ようとしていないのかもしれない。詩音は少しだけ自分を責めた。

「それで、双海さんは何を悩んでたの？」

「え……私は、ただひとりでゆっくり本が読みたくて……」

「読書してるようには見えなかつたけど？」

「……」

笑顔のまま、瞳だけ真剣な光で追求してくるおる。

やっぱりこのひとは苦手だ。詩音はそう思い直した。

「それは……」

「うそうそ。そんなこと、気楽に人に話せたら、こんなところで悩んだりしてないよね」

あつげらんとかおるは笑った。だが、その目に少し寂しそうな色があることには、詩音も気づいた。

「私たち、そんなに親しいわけでもないしね」

「音羽さん……」

「だけどさ、よく知らない同士だからこそ、云えちゃうこと

もあるかもしれないじゃない？ 相談に乗る、とか大袈裟な話じゃなくてさ、ただ胸にたまったものを吐き出したい、とかね。石仏とでも思えばいいんじゃないかな」

「石仏……ですか」

お地藏様スタイルのかおるをつい想像してしまい……詩音は、思わず吹き出してた。

「……ん？ なあに？ 私、何か面白いこと云った？」

「い、いえ……。失礼しました」

「変なのー」

云いながら、かおるも笑っていた。

同年代の女の子と、こうして談笑することも久しくなかったような気がする。詩音はいつの間にか心が軽くなっていることに、自分でも驚いていた。

「悩んでるわけじゃ、ないんです」

つい、思っていることを口に出してしまった。そう、かおるの云うとおり、ただ誰かに聞いてもらいたかったのかもしい。

「悩んでるわけじゃなくて……。ただ、自分で自分の気持ちが、よくわからなくて」

「そういうのを、世間一般では『悩んでいる』って云うんじゃないのかな？ ……あ、石仏はしゃべっちゃダメね、ごめんごめん」

片目をつぶって、舌を出すかおる。詩音も小さく微笑んだ。

「そうですね……。私、ほんと、どうしてしまったんでしょう。……あのとき、裏切られたような気持ちに、なっちゃったんです。彼に何を期待していたわけでもないはずなのに……」

ううん、それどころか、私は彼をちゃんと見ようともしないなかったのだから……。そんな私が、彼に腹を立てる筋合いはないんです」

「……」  
「変ですよ、私」

言葉にすることで、もやもやしていたものを整理することができた。

この心の動きが、なんによるものなのかは、まだわからないけれど。

それは単にプライドを傷つけられたという思いかもしれないし……。もしかしたら、新しい物語の始まりであるかもしれない。

そんなことを、不思議と冷静に考えることができた。

かおるは詩音の呟きを黙って聞いていたが、ふと視線をまた金網の向こうにさまよわせた。先ほどと同じ陰りを漂わせて、自身もまた独り言のように呟く。

「普通だと思っよ」

「……え？」

「一緒に……。いるんだからさ、素直に怒って、笑って、泣いて、……そうやって、気持ちをぶつけなきゃ。自分だけ、相手を思いやったつもりになって……。気持ちが、すれ違ってしまったら……。悲しいよ」

「音羽さん……」

かおるがどんな想いで遠くを見つめているのか、詩音には少しだけわかったような気がした。そして、それを彼女に口にしたことを、激しく後悔した。

「ごめんなさい、私……」

「ううん、いいの。私もね、誰かに聞いてほしかったんだ」  
振り向くと、かおるはいつものように笑っていた。

いや、「いつもの」ではない。作られた明るさではなく、心の内から自然とこぼれてくる笑顔で。

知らず知らず、詩音も微笑を浮かべていた。

そのとき、鐘の音が聞こえてきた。

「あ、予鈴だ。戻るっか」

「はい」

「またなんかあったら、ここで石仏の会しようか」

「そうですね……。そのときは、紅茶をご用意します」

「お供え物？」  
からかうように、かおるが笑う。詩音もただ笑顔を返した。

\*

放課後、信は図書室に来なかった。

なんとなく沈んだ気分、詩音は階段を下りる。

私は、彼に来てほしかったのだろうか？

かおると話して自分の気持ちに少し整理がついたような気がしたが、それでもやはりまだそれは、詩音自身が持て余す感情だった。

いつもどおり両手に本を抱えて、下駄箱に出た。すると、そこには少年がひとり、立ち尽くしていた。

「……稲穂さん」

「あ、ああ。今、終わったの？ お疲れ様」

優しく微笑む信。いったい、いつからここにいたのだろうか？

「私を……待っていてくださったのですか？」

「えっと……うん。あんまりさ、強引に押してばかりじゃ嫌われるって智也たちに云われて、それで図書室には行かなかったんだけど……でも、やっぱ一緒に帰りたくって。はは、何やってるんだろな、俺」

信は照れくさそうに頭をかいた。

詩音は微笑みながら、手にした荷物を差し出した。

「……え？」

「持ってくださいませんか？」

「あ、持つ持つ、喜んで……そっちも持つよ」

「結構です」

詩音の荷物をすべて取り上げてしまいかねない信の様子に、詩音は苦笑しながら歩き出した。信が慌ててあとを追う。

夕日がふたりの長い影を、校庭に落とす。

## 第四話 気持

「……あ、あれ？」

授業終了のチャイムと同時に、詩音の席に行こうと立ち上がった信だったが、折悪しく先生に呼びつけられた。前回の試験のことについて、説教を受ける。早く終わってほしくて生返事をしていたのが災いして、かえって長引いてしまった。

ようやく解放されて振り向くと、教室にはもう詩音はいなかった。

「詩音ちゃんなら、もう出てっちゃったよー」

きよるきよると周りを見回す信に、唯笑が声をかける。

「そ、そっか。ありがと」

聞くや、弁当を抱えて自分も外へ飛び出そうとする。その腕を智也がつかんで引き止めた。

「待てよ、信」

「じゃ……邪魔するな、智也！」

「気持ちはわかるけど落ち着けて。そう四六時中追いまわしてたんじゃ、かえって嫌われるぞ」

「そうだよー。詩音ちゃんは、静かに本を読んでののがいちばん好きなんだから」

確かにそのとおりだった。信も、自分のやっていることが裏目に出ればかりということには自覚していた。

けれど、接点がない以上、無理やりにも作るしかないではないか。

「押してダメなら引いてみなつてな。信のほうから距離を置けば、意外と進展があるかもしれないぞ」

「……ほんとにそう思うか？」

「いいや、全然」

「すぐに忘れられちゃいそうだよねー」

親友と以前好きだった娘の無邪気で残酷な言葉に打ちのめされ、信は肩を落としてため息をついた。

智也が笑いながら、その背中を叩く。

「まあ、そう落ち込むなって。ちよっと離れて冷静になったほうがいいのは、確かだと思っぞ。……というわけで、今日は購買に付き合えよ」

「購買？ 弁当があるのに、なんで」

「双海にかかりつきりて、お前の情報網も地に落ちたな。今日からまた、小夜美さんが来てるんだぜ」

「小夜美さんが？ マジで？」

「ああ、おばちゃんがまたちよっと調子悪いとかで。今回はほんとに短期の代打らしいけどな」

「へえ……」

「だからさ、挨拶行ってこようぜ。な」

「ああ、智ちゃん、信くんダシにして、ほんとに自分が小夜美さんに会いたいただけなんでしょう」

ふたりのやり取りを聞いていた唯笑が、膨れっ面で口を挟んでくる。

「何云ってるんだよ。俺はただ久しぶりだから挨拶を……」

「じゃあ、唯笑も行くよ」

「……わかったよ。信、行こうぜ」

結局、信は強引に購買まで拉致されることになった。

教室を出るとき、信は未練がましく空の詩音の席を振り返った。

\*

少し遅くなったので、購買の混雑は一段落していた。藍色の長い髪を後ろで縛った女性が、微笑んでいるのが見える。

「えーと、お釣りははちじゅうえんでいいんだっけ。え、違う？ ひやくにじゅうえん？」

「……相変わらず、釣り銭を間違えているらしい。智也たちは苦笑しながら近づいた。」

「小夜美さん、お久しぶり」

「おーっ、智也クンに唯笑ちゃん、信クンも。久しぶりね。いらっしやいませ……って、なによ、三人ともお弁当持ってるじゃないの」

笑顔から不審顔、そして一転しかめっ面へと、相変わらず子供のようにくるくると表情が変わる。智也は再び苦笑しながら答えた。

「今日はご挨拶に来ただけですから」

「挨拶だけしてもらったって嬉しくないよー。買い物してくれなきゃ」

そう云いながらも、小夜美はもう笑顔に戻っていた。

「せめてお土産ぐらい持ってきなさいよ」

「唯笑の手製弁当でよければ、パンと交換で……」

「あ、智ちゃん、ひっどーい」

「あはは。相変わらず仲いいのね。……そうだ、せっかくだから、ここで食べていく？」

購買の奥を指しながら、小夜美が提案した。奥には智也が伝票整理を手伝ったテーブルがあり、少し狭いのを我慢すれば、四人座れないこともない。

「いいんですか？」

「うん。この時間なら、もうお客さん、ほとんど来ないしね。狭いけど、どうぞ」

「じゃあ、お邪魔します」

\*

「それで、おばちゃんは大丈夫なの？」

「うん、ちよつとタチの悪い風邪にかかっちゃってね。インフルエンザかも。だから、一週間ぐらいは休んでもらおうと思っ  
て」

「そうなんですか……。小夜美さんは、大丈夫なんですか？」

唯笑が心配そうに眉を寄せて、小夜美のほうを見た。

「だあいじょうぶ。あたし、昔から風邪とか引かないから」

笑顔でそう答えた小夜美に対して、何かに納得したように智也が深く頷いた。たちまち小夜美が不機嫌になる。

「とくもくやくクン、今、バカは風邪引かない」とか考えたでしょう」

「えっ……いや、俺は別に……」

「失礼だよ、智ちゃん」

「だから、云ってないって」

そんな風に談笑しながら食事が進む中、信はひとりぼんやりと箸を動かしていた。いつの間にか会話がやんで、三人の視線が集中していることにも気づかないほどに。

「……ん、んっ？　なんだ？」

ふと顔を上げた瞬間、三人と目が合って信は驚いた。

智也と唯笑が同時にため息をつき、小夜美が首を傾げる。

「どうしたの、信クン？　元氣ないね」

「えっ？　そ……そうっすか？　そんなことないですよ」

「ふーん。じゃあ、考え事？」

ずいっと小夜美が身を乗り出してきて、信の顔を覗き込む。高校生が使うものとは明らかに違う香りを身近に感じて、信は狼狽した。

「こんな美人が隣にいるのに、上の空なんて許せないな」

「自分で云うかい」

突込みを入れたのは智也だ。信にはそんな余裕はない。

小夜美が体を離して智也にあかんべをすると、信はほっと一息ついた。

「聞いてやってよ、小夜美さん。こいつさ……」

「智也！　てめえ、余計なこと云うなよ！」

「いいじゃない。大人の女の人の意見も参考になるかもよ」

「小夜美さんがオトナかどうかはともかく、まあ意見は色々聞いたほうがいいな」

「もう、いちいち可愛くない子ね。……で、なんなの？」  
結局、信は洗いざらい白状させられた……というより、智也と唯笑がしゃべってしまった。

小夜美は茶化すでもなく、興味深げに相槌を打ちながら聞いていた。信は憮然として横を向いたままだ。

「……ふーん。なかなか難儀な娘を好きになっちゃったわね」  
「そうなんだよ。それなのに、こいつ、押しの手でさ……」  
「なるほど……」

頬杖をついて、思案顔になる小夜美。

信は本気でアドバイスを期待していたわけではなかったが、そうして親身な風を見せられると、つい身を乗り出してしまふ。

「やああって、小夜美が口を開こうとしたとき。」

「おーい、誰かいないのかー？」

店先で誰かが呼ぶ声があった。声からして、教師のようだ。

「あ、ごめんなさいーい」

慌てて小夜美が席を立て、応対に出る。

智也たちが時計を見ると、もう昼休みは残り五分強しかなかった。

「やば。そろそろ戻らなきゃ」

「あ、ほんとだ」

そそくさと弁当箱を片付けて、三人は立ち上がった。気分転換にも相談にもならなかった信は、思わずため息をつく。

外へ出ると、教師の城ヶ崎が牛乳を買いに来ていた。

「なんだ、お前ら、こんなところで」

「あ、友達なんですよ」

小夜美が笑顔でフォークを入れてくれる。本来、購買の中に生徒が入りするのは禁止されているのだ。小夜美に免じてか、城ヶ崎は特に説教はしなかった。

「霧島とか？……まあいい。勉強も教えてやってくれよ」

「小夜美さんが？」

思わず、智也が声に出して驚いてしまった。慌てて口をふ

さぐが、小夜美は不機嫌に、城ヶ崎は不審そうに振り向いた。

「何を云ってるんだ。霧島はここを次席で卒業してるんだぞ」

「……え？」

「次席……って上から二番目？」

「マジで？」

「……やめてください、先生。昔のことですから……」

智也たちの注視を浴び、小夜美が照れながら云った。

城ヶ崎がニヤニヤしながら答える。

「単純な計算ミスがなければ、首席だったのにな」

「……だから、昔のことですって……」

今度は本気で赤面して、小夜美はうつむいた。

そのことになぜか智也たちが安心感を抱いたとき、昼休み終了のチャイムが鳴った。

「ほら、お前ら、さっさと教室に戻れ」

「はいっ。じゃあ、小夜美さん、またね」

「ありがとうございましたあ」

手を振って見送る小夜美。信の後姿を見て、その眉をほんの少しひそめた。

\*

教室に戻り、詩音が隣の席にいたことを信は確認したが、その顔を見ることができなかった。

授業が終わって、詩音が図書室に去っても、追いかけてなかった。智也たちの誘いも断り、誰もいなくなった教室にひとり座り続けた。

(何やってるんだろうな、俺は……)

確かに智也の云うとおり、頭を冷やしたほうがいいのかもれない。そう考えながら、ようやく席を立った。

自然と図書室に向かいそうになる足を無理やり方向転換させ、階下へ降りる。

購買の前を通りかかると、小夜美がダンボール箱の山と格闘しているのが目に入った。

「……小夜美さん、何してるんですか？」

「ん？ ああ、信くん……きゃああっ！」

信に気を取られた瞬間、バランスが崩れてダンボール箱が倒れ落ちてきた。あわや小夜美が下敷きになるところだったが、信が駆け寄って支えて事なきを得た。

「だ、大丈夫ですか？」

「……うん、ありがと。助かったあ」

頭をかきながら、小夜美は照れ笑いを浮かべた。

彼女の仕事にはいつも人をほっとさせる何かがあり、今の信にはそれが胸に染み入るようだった。

「在庫整理ですか？ よかったら、俺、手伝いますよ」

「ほんと？ 助かっちゃうなあ。……あ、でも、さっきの話だと、図書室に行く時間なんじゃないの？」

「いたずらっぽく小夜美が微笑む。けれど信には苦笑いを返すしかできなかった。」

「……そうしちゃいそうだから……なんか、ほかのことやっていたいんですよ」

「ふーん……」

一瞬、小夜美は憂い顔を見せたが、信が気づく前に笑顔を浮かべた。

「よし、じゃあ、きりきり働いてもらっちゃおう！ さあ、運んで運んで！」

「うっ……やっぱ失敗だったかも……」

「男に一言はなあい」

発破をかけられた割には、仕事量はさほどのものではなかった。十五分ほどで片付けを終えた信は、額にうっすらと浮かんだ汗を拭いながら、小夜美に声をかけた。

「終わりましたよ、小夜美さん」

「ありがと。じゃあさ、お茶でも飲んで帰ろっか」

「……え？」

「おねーさんが、お礼に奢ってあげる。ね、いいでしょ」

信の返事も待たず、小夜美は歩き出していた。

信はまだ学校に 図書室に未練があったが、振り切った小夜美のあとを追った。

\*

学校の近くの喫茶店にふたりは入った。珈琲をふたつ注文する。

「あたしん家、すぐ近くだから、うちでもよかったんだけど、それじゃムードないしね」

からかうように笑いながら小夜美が云うと、信は赤くなつて曖昧な返事をするだけだった。その様子を見て、小夜美は喉を鳴らして笑う。

「信くんって、意外に素直なのね。智也くんなんかより、全然可愛いかも」

「やめてくださいよ。いつもはこんなじゃないんですから」

「へ？ じゃあ、今日はどうして？」

「そりゃあ……小夜美さんみたいな綺麗な人と一緒なら……」

「あ、嬉しいこと云ってくれるなあ。智也くんにも、信くんの爪の垢煎じて飲ませてやりたいわね」

そんなことを話しているうちに、珈琲がやってきた。一口飲んで、小夜美が少し真剣な表情を浮かべる。

「さて、と」

「……？」

「昼間はごめんね。なんか話の種にただだけみたいで」

「あ……いや、そんな……」

気にしてくれていたのか、と思うと、素直に嬉しかった。在庫整理も、こうしてお茶に誘ってくれたのも、気を使ってくれたからなのだろう。久しぶりに信は明るい笑顔を見せた。気にしないでくださいよ。智也の奴なんか、本気でネタにし



ただけなんだから」

「そうかな？ あれで結構心配してるんだと思うよ」

「あれですか？」

そう答えてはいたが、信にもそのことはわかっていた。

だが、智也に気を使われることは、今の信にはかえってつらかった。……なぜなら、智也こそが恋敵であったから。

再び暗い物思いに沈みそうになった信は、頭を振って思考を追い払い、小夜美のほうに向き直った。

「正直、俺、どうしたらいいかわからなくて……。やっぱり智也たちの云うとおり、距離を置いたほうがいいのか」

「……」

すぐには答えず、小夜美はまた一口珈琲を飲んだ。

カップを下ろし、優しい微笑を浮かべる。

「信クンのやりたいようにやればいいと思うよ」

「……え？」

「何が正しいかなんてやってみないとわからないし、ひとの気持は、もつとわからないよ。だったら、自分の気持に正直になるのが、いいんじゃないのかな。あのとき、こうすればよかった……なんて後悔するのは、最悪だもんね」

「……」

「思いやりは大切だけど、自分の気持を殺しちゃいけないよ。

あたしは、そう思う」

「小夜美さん……」

そう、俺はそうしたかったんだ。彼女と、一緒にいたかった。ただそばにいたかった。

その気持に嘘をついて、いったい、何が伝えられるんだろう。

信はすでに立ち上がっていた。

「ありがとう、小夜美さん。俺、やっぱり学校に戻ります」

「そう。……頑張れよ、少年」

微笑んで、小夜美はVサインを出した。笑顔で頷いて、信は駆け出していく。

頬杖をついてその姿を見送る小夜美の瞳には、深い憂いが浮かんでいた。

「自分の気持に正直に……か。言葉にするのは、簡単だよ。」

信クン、君は偉いよ」

グラスを人差し指で軽く弾く。キン、と硬い音が響いた。

「頑張れ、少年……」

もう一度、小夜美は呟いた。

\*

学校まで駆け戻った信は、下駄箱のところで足を止めた。

図書室まで行く勇気がどうしても出てこない。彼女の邪魔をしないよう、ここで待ってしよう……。そんな言い訳じみた考えが浮かんだ。

邪魔だというのなら、こうして待っていること自体、迷惑なのではないか。

再び気持がくじけそうになる。

だけど、俺は一緒にいたい。詩音ちゃんと一緒にいたいんだよ！

それが許されないなら……。今度こそ、俺は……。

そのとき、階段を下りてくる足音が聞こえた。

一見華奢なのに、両手に抱えきれないほどの本を抱えて歩いてくる少女。

信の姿を認めて、彼女は目を丸くした。

「……稲穂さん」

「あ、ああ。今、終わったの？ お疲れ様」

我ながら不自然だと思いながら、精一杯の笑顔を浮かべた。

それに対して、彼女はいつもの無表情。では、なかった。

「私を……待っていてくださったのですか？」

西日が差し込み、その表情ははっきりとはわからなかったが、微笑んでいるように信には思えた。それだけで十分だった。

Can You Keep A Secret ?

した。明日からは必ず毎日、購買でパンを買おう。信はそう決意

## 第五話 失意

冬の陽は短い。  
すでに薄暗くなった昇降口で、今日も彼、稲穂信は靴箱にもたれて立っていた。

真剣な、そして少し憂いを含んだその横顔は、それなりに美形と言えなくもない。事実、信はもてるほうだった。

だが、これまで信は軽そうに振る舞ってはいても、誰かを真剣に恋したりはしなかった。まるで自分をそう戒めているように。今年の秋が、来るまでは。

階段を下りてくる足音がする。信は面を上げ、期待通りの姿が現れると、たちまち破顔した。

「お疲れ、詩音ちゃん」

「お待たせしました」

相変わらず両手にいつぱいの本を抱えた双海詩音は、本の陰から顔を覗かせて、微笑んだ。教室では滅多に見られないその笑顔を向けられると、信は思わず小躍りしたくなる。もちろん実際にやれば呆れてため息をつかれるのがわかってるので、信は平静を装いつつ、本の山を受け取った。

「ありがとうございます」

「こんでもない。行こうか」

「はい」

そうしていつも通り、ふたりは肩を並べて駅までの道を帰るのだった。

放課後、待ち合わせて、信が詩音の荷物を持って帰る。それはもうすっかり日常の風景と化していた。しかし、

「結局、つきあってるの？」

と、唯笑や智也に訊かれると、ふたりとも頷くことはできない。そんな微妙な関係が続いていた。

「……もう、昇降口で待っているのは、寒いのではないですか？ 図書室にいくのであればいいのに……」

信の横顔を見上げながら、詩音が訊いた。気遣わしげな視線に照れながら、信は頭をかいた。

「いやー、どうも俺、あの場所の緊張感に馴染めなくてさ」

「三上くんは平気で居眠りしてましたけど……、あ……」

おどけてみせる信に苦笑しつつ、つい口にしてしまったその言葉。その名前に、慌てて詩音は口をつぐむ。

信は笑顔のまま、黙っていた。

「……ごめんなさい」

「なにが？」

何事もなかったように、信は笑う。智也はバカだからな、場の空気が読めないんだろ、という信の冗談に笑顔を返しつつ、詩音の胸は痛んだ。

私は卑怯だ、と詩音は思う。彼の優しさに甘えて、彼を傷つけている。彼が図書室に来ようとしなくても、きっと智也を重ねて見られるのが嫌なのだろう。

……だけど、私は

「詩音ちゃんはさ、日本で年越ししたことあるの？」

「え？」

物思いに沈んでいた詩音は、ふいに声をかけられて、弾かれたように顔を上げた。笑顔の信と目が合う。話題を変えてくれた信の気遣いに、また胸が痛んだが、それを気取らせないことが唯一彼のためにできることだと考えた。

「いいえ、まだありません」

「そっか、じゃあ紅白見て、ソバ食って、除夜の鐘聞くのも今年が初めてなんだな」

「……それが、日本の伝統行事なのですか？」

「うーん、まあ、そんなもんかな」

相変わらずの詩音のズレ方に苦笑したあと、信はほんの少し真顔になって、詩音を見つめた。

「初詣、一緒に行けるといいな」

「……はい」

頷いたのは、確かに詩音の正直な気持ちだった。

\*

駅ホームで、詩音と信は並んで電車を待っていた。

電車が来たら、それで今日はさよならだ。ふたりは、乗る電車の向きが逆だった。信は家まで詩音を送りたがったが、そこまでしてもらおうわけにはいかない、と詩音はいつも固辞していた。

「日本のお正月、楽しみです」

先ほどの話を思い出して、詩音が言った。信も笑顔で頷く。

「詩音ちゃんなら、きつと振り袖も似合うだろうな」

「……そんなこと……」

赤くなつてうつむく詩音。その姿に、信はもう鼻の下を伸ばしっぱなしだった。

「……そ、それより、年が明けたら、もう受験のことを考えなきゃいけませんよね」

「……嫌なこと思い出させるなあ」

照れ隠しに詩音が切り替えた話題に、信は一気に現実引き戻されて顔をしかめた。しかし、詩音は恐ろしいほど真剣な顔になっていた。

「日本の受験地獄は大変なものだそうですね。朝から晩まで、日曜まで塾に通って……」

「し、詩音ちゃん？」

「そんな生活を強いられたら、本を読む時間がなくなってしまう」

深い憂いを込めて、詩音がほうとため息をつく。本気だとわかったから、信は思わず吹き出してしまった。

「……何かおかしいんですか？」

怪訝そうに、そして少し拗ねたような調子を声に込めて、

詩音が信を横目で伺った。そんな表情が、信にはたまらなく可愛い。笑いを治めるのに苦労しつつ、信は何度も頭を下げた。

「ごめんごめん。でも、詩音ちゃんなら頭いいから、そんな心配しなくて大丈夫だよ」

「そうでしょうか」

まだ釈然としない様子で、詩音は首を傾げた。そして、今度はいつの間にか信のほうに真剣な表情で、じっと自分を見つめていることに気づいた。

「稲穂さん？」

「あ……ごめん、えっと……詩音ちゃんは、さ」

「はい」

「その……大学は、日本で行くつもりなの？ もし、お父さんがまた、仕事の都合で引っ越しても……」

「……」

正直、それはまだ決めあぐねていた。もしそうなったとき、日本に一人残るのは不安だったし、父を一人で行かせるのも忍びなかった。環境的にも、日本より海外の大学のほうがいのように思える。

けれど、気がつくくと詩音は、笑顔で頷いてしまっていた。

「そのつもりです」

「そ……そっか。はは……よかった」

文字どおり満面の笑顔で、信はよかったと何度も繰り返して頷いた。

自分がここにいることをこんなに望んでくれる。そのことを嬉しく思いながらも、詩音の胸は再び痛んだ。

「じゃあさ、行きたい大学とかあるの？」

「それはまだ……」

「そっだよな。じゃあ、やりたいこととかは？」

詩音の屈託に気づかない様子で、信は話を続けた。

将来の夢、やりたいこと、そんな話を誰かと語り合ったこともなかった……、詩音は自分の変化に、今更ながら少し驚

いていた。

「そうですね……。やはり、本に関わる仕事がしたいと思えます。」

「やっぱり、そうか。出版社とか？」

「どちらかといえば……。図書館司書のような……。」

「なるほどー。司書か、なんかかっこいいな。」

「そんな……。」  
いつも自分の云うことに大袈裟に感心する信の態度に、詩音はまた少し頬を赤くした。信の言葉であれば、嫌みに聞こえない。それも詩音には不思議だった。

「稲穂さんは、どうなのですか？」

「俺？ 俺は……。」  
問い返され、信は目を丸くした。そして、眉を寄せて少しの間考え込んだあと、薄く笑って空を見上げた。

その笑顔に、らしくない翳りを感じて、詩音は不安な気持ちになった。

「稲穂さん？」

「俺は……何をどうしようか……。」

「え……？」

詩音が聞き返そうとしたとき、アナウンスが流れ、電車が近づいてきた。

信は残念そうな、けれどどこかほっとしたような表情で、詩音に荷物を渡した。

「じゃあ、また明日。気をつけて。」

「……はい。ごきげんよう。」

信のその表情が引かかったが、それを問いたですことは、今の詩音にはまだできなかった。

電車に乗り込み、軽く頭を下げた詩音の前で、ドアは閉まった。走り去る電車を、ホームに立ったまま見送る信を、詩音もまた電車の窓からずっと見ていた。

別れ際の信の表情が、やはり気になった。けれど、今の自分には、まだそこまで彼の心に踏み込む資格はないように思

える。こんな曖昧な気持ちのままでは。

もついい加減、はつきりした答えを彼に返さなければいけない。詩音はそう考えて、唇を噛んだ。

「ただ、もう少し。もう少しだけ、この心地よい時間に立ち止まっていたい。そんな身勝手は許されないうか。」

不安と、焦りと、切なさを込めて、詩音はまた大きくため息をついた。

それは予感だったのかも知れない。  
痛みは、すぐ近くに來ていた。

\*

「よつと……こんなもんかな？」

「そうですね。あと一軒回ったら、休憩して、お茶にしましょうか。」

「……ってことは、そのあともまだまだ？」

「もちろんです。」

「……詩音ちゃん、ほんとにそのうち、床が抜けるよ。」

日曜日の昼下がり。詩音と信はこれまた定番となった、書店周りをしていた。信は相変わらず荷物持ちだったが、詩音と二人で出かけられるなら、不満はなかった。

けれど、詩音のほうの気持ちは、少し違っていた。いたずらっぽい笑みを浮かべていたのに、ふと何かに気づいた様子でうつむいてしまう。信は首を傾げて、その横顔を見た。

「詩音ちゃん？」

「あ……ごめんなさい。いつも、私の用事につきあわせてしまって……。稲穂さんがほかに、行きたいところがあれば……。」

「そんなことが、いいよ、気にしなくて。」

「でも……。」

「俺は詩音ちゃんといられれば、それでいいよ。」

何のてらいもなく、笑顔でそう口にする信に、詩音は赤くなって沈黙してしまった。さらに、

「どうしたの？ 最近、なんか変だよ？」  
と、笑顔のまま顔を覗き込まれ、慌てて詩音は目をそらし  
た。

「そ…… そんなことありません」

「そう？」

「そうです。それじゃ、私がるで人に気を遣わない人間み  
たいじゃないですか」

照れ隠しに、わざと怒ったような口調で云う。そんな不器  
用さが詩音は自分でも腹立たしかったが、信は変わらず笑顔  
のままだった。

「ごめんごめん、そうじゃないんだけどさ。でもほんと、気遣  
わないでよ。俺が、詩音ちゃんといいたいんだ」

「稲穂さん……」

私だって……、信の笑顔につられて、思わず詩音がそう答  
えそうになったとき。

「信……？」

「え？」

背後から信を呼ぶ声に、二人は同時に振り向いた。そし  
て、その瞬間、信の笑顔は凍り、蒼白になった。

そこには長い黒髪と、やや切れ上がった瞳がきつい印象を  
与える、美しい少女がいた。しなやかな体つきからも、気む  
ずかしい猫を連想させる。歳は、詩音たちと同じぐらいだろ  
うか。

そんな少女が、瞳に涙を浮かべて、まっすぐに信を見つめ  
ていた。

「やっぱり……！ やっと……逢えた……」

「真冬……」

震える声で、信が少女の名前を呼ぶ。

詩音は青ざめた信を見上げ、そしてまた少女に目を向け  
た。

真冬と呼ばれた少女は、詩音などまったく眼中にないよう  
に、ただ強い視線を信に向けている。

「お前…… どうして……」

「どうして？ それはこっちの台詞よ！ 突然、もう逢わな  
いだなんて云って……、学校も、浜咲に行くって云ってたの  
に、全然違うところ……。家に行っても、逢ってくれないし……  
電話だって……」

「……」  
「……」  
「……」

「……」  
「……」  
「……」

「……」  
「……」  
「……」

「……」  
「……」  
「……」

「……」  
「……」  
「……」

「……」  
「……」  
「……」

「……」  
「……」  
「……」

「……」  
「……」  
「……」

「……」  
「……」  
「……」

「……」  
「……」  
「……」

「……」  
「……」  
「……」

「……ごめんな、詩音ちゃん」

ふと声をかけられ、はっと詩音が振り向いたとき、信は小さく微笑んでいた。

その笑顔に、詩音は胸が引き裂かれる思いだった。

これまで、どれだけ彼の笑顔に救われてきたか知れないけれど、今日のこんな笑顔は見たくなかった。そんな、自分を誤魔化すような笑顔は。

「行こっか」

「……」

「詩音ちゃん？」

「……」

うつむいてしまった詩音を見て、信はわずかにため息をついた。そしてまた、さっきと同じ笑顔が無理矢理浮かべた。

「気、悪くさせちゃったかな。……当然か。ごめん」

「……」

「今日はもう、帰るかいい？」

黙ったまま、詩音は小さく頷いた。信も頷き返し、先に立つて駅まで歩き出した。

それからの道のりは、二人とも無言だった。駅で切符を買い、改札を抜け、ホームに立つ。さっきまでより、ほんの少し距離を開けて。

やがて、電車が近づいてくると、信は荷物を差し出した。

「じゃあ……また、明日」

「……」

詩音は荷物を受け取らなかつた。うつむく詩音の前に電車が止まり、ドアが開く。発車のベルが鳴り響いたとき、その音にかき消されそうな小さな声で、詩音は云った。

「送って……くださいませんか」

「え……？」

「家まで……送ってほしいんです。お願いします……」

我が耳を疑い、茫然とする信の返事を待たず、詩音は電車に乗り込んだ。閉まりそうになるドアの間に、慌てて信は

体を滑り込ませた。

\*

なんとなくそわそわして、周りをきよるきよると見回している信を横目に見ながら、詩音はキッチンに入った。お湯を沸かす用意をしてから、紅茶を選び始める。

今日はどんな紅茶がいいだろう。こんな気分ときは……

……  
 そこまで考えて、詩音は、ほっと大きいため息をついた。

「こんなって……どんな？」

自分でも信じられなかつた。信に送ってほしいと頼んだだけでなく、家にまで招じ入れてしまうなんて。今日も父は仕事で不在だし、お手伝いの人も日曜は来ない。ふたりきりということだ。

高鳴る心臓を鎮めるために、詩音はハーブティを選んだ。どうしても、あのまま別れてしまうのは嫌だった。けれど、人が多いところにいるのも煩わしかった。だからつい、こうして家に招いてしまった。

「……」  
 だけど、彼を招いて、そしてそれからどうしようというのだろうか。

あの真冬というひとのことを知りたい。

「……」  
 だけど、そんな権利が私にあるの？」

考え事にふける内に、紅茶を蒸らしすぎてしまった。これは百点満点の紅茶にはほど遠い。

詩音はまたため息をつくくと、トレイにポットとカップを二つ乗せて、居間へ戻った。

「お待たせしました」

「……あ、うつん、全然」

物珍しそうに暖炉や調度類を眺めていた信は、慌ててソファに座り直した。バツの悪そうに苦笑いする彼に、いつもなら詩音も苦笑を返すところだが、今はどうしても、初めて逢っ

た頃のように硬い顔になってしまっ

そんな詩音の表情を見て、やや途方に暮れた様子で、信はカップに手を伸ばした。だが、紅茶を一口すすると、たちまち顔いつぱいの笑顔になった。

「相変わらずうまいよなあ。やっぱ、詩音ちゃんの紅茶は格別だよ」

「……そんなことありません。今日は……失敗してしまいましたし……」

いつものような信の大袈裟な褒め言葉に、頬を染めることもなく、詩音は下を向いていた。素直になれない気持ちがあったのと、実際、今日は蒸らしすぎて渋みが出過ぎてしまっている。

初めて招待した紅茶が失敗作だなんて、なんてことだろう。やっぱり入れ直せばよかった。そんなことを考えている自分に狼狽し、詩音はますます下を向いてしまった。

しかし、信は詩音の言葉に目を丸くしたものの、やはり笑顔のままでもう一口飲んだ。

「そうかな？ 俺にはすごくおいしいけど。まあ、俺の舌なんて、当てにならないのはわかっているけどさ」

「そういう意味じゃ……」

「うん、わかっている。でもさ、詩音ちゃんが入れてくれた紅茶って、なんかこう、心がほっとするんだよ」

「え……」

詩音は思わず顔を上げた。微笑んで、まっすぐに見つめてくる信と目が合う。再び心臓が高鳴り、頬が紅潮してくるの

がわかったが、それでも目をそらすことができなかった。

「味がいいのは云うまでもないけど、それだけじゃない、なんて云うのかな……。うまく云えないけど、気持ちがよく落ち着くんだよ。だから俺は、詩音ちゃんの紅茶がすごく好きだな」

「稲穂さん……」

私にとっては、あなたの笑顔がそうです、そう素直に

云えたなら、どんなによかっただろうか。詩音にはまだその勇氣はなかったが、信の言葉が、彼の心にほんの少し踏み込もうとする力を、詩音に与えてくれた。

詩音は信の瞳をじっと見つめたまま、口を開いた。

「あのひとのこと……教えてください」

「え……？」

「今日、会った……真冬さん、でしたか」

「詩音ちゃん……」

信はその言葉に戸惑い、表情を変えたが、詩音のひたむきな視線から目をそらすことはできなかった。そのまましばし沈黙の時間が流れる。やがて、信が深いため息をついた。

「彼女……藤村真冬は……」

＊

俺が……昔、つきあっていたひとだよ」

刺すような痛み、という言葉は比喻ではないことを、このとき詩音は、身を以て知った。

深くなっていく夜の闇を、詩音は窓からじっと見つめていた。

目の前の机には、一口も飲まないまま、すっかり冷めてしまった紅茶がある。信がほめてくれた心を暖める効果も、今の自分自身には効き目がないように思えた。

予想通りの答えだったけれど、それでも、いや、それだからこそ、信の告白は詩音に衝撃を与えた。文字通り、石のように黙りこくってしまった詩音に、信はぼつりぼつりと昔語りをした。

藤村真冬は、信や詩音とは一歳年上だという。部活を契機に知り合い、中二の始め頃から付き合っていたのだそう

だ。けれど、幸せな時間はあまり長くは続かなかった。彩花の



事故が起こってしまったからだ。

智也の恋人を奪う事故を引き起こした自分を、信は許せなかった。そんな自分が、恋人と今まで通りの時間を過ごすなんて、できるはずがないと思った。

だから、信は真冬に一方的に別れを告げ、高校もわざと真冬の通う浜咲学園ではなく、澄空にした。償いを果たすまで、恋をするなんて許されない。そう思ったのだと。

信が話し終えても、詩音はやはり黙ってうつむいたままだった。長い時間が経って、信がそっと立ち上がったときも、顔を上げなかった。

「じゃあ……そろそろ帰るよ、俺」

信はドアのところまで歩き、そこで振り返った。悲しげに自分を見つめる信の顔を、努力して詩音は見まいとした。

「勝手な言い草だと思うかもしれないけど……」

「俺は……詩音ちゃんが、好きだよ」

「……」

「じゃあ、また明日」

静かにドアを閉めて、信は出ていった。門が閉まる音がかすかに聞こえたとき、ようやく詩音は立ち上がり、玄関へ走った。けれど、もう外には信の姿は見えなかった。

のろのろと室内に戻り、紅茶のお代わりを入れて、詩音は自分の部屋へ入った。そして、せっかく入れた紅茶に口をつけないまま、窓の外をただ眺め続けていたのだった。

信の言葉が、詩音の胸で何度もよみがえった。

勝手？ 勝手なのは私だ。彼の痛みを無理矢理引き出しておいて、何も云わずに帰らせてしまった。あれでは私が責めていると思われても仕方がない。

どうしてあんなに動揺してしまったのだろう。彼に昔、恋人がいたって何の不思議もないし、そのことを私に黙っていた

のだから、別におかしいことじゃない。

それなのに、詩音はもう何度目かのため息をついた。家の前の道を、車が走っていく。窓越しに差し込むライトのまぶしさに目を細め、詩音は今更気づいたように、カーテンを閉めようと手を伸ばした。

そのとき、窓に映った自分の姿を見て、詩音は動きを止めた。

真冬の姿が、思い出されていた。

綺麗なひとだったと思う。火のような情熱が、いつそ凄絶な迫力を与えていた。そして何より、あの見事な黒髪……！

詩音は髪を指ですいてみた。北欧系のやや銀がかかった薄茶色の髪。たとえいじめられる材料になったとしても、母譲りのこの髪が自分でも大好きだったし、誇りでもあった。

だけど、信は……？ 彼は、あの黒髪を愛したのだろう。私のこの髪を、彼はどう思っているのだろうか。

気がつけば、詩音は涙を流していた。

こんなに苦しい気持ちをなんと呼べばいいのか。たった一言で言い表せるその想いを、けれどまだ詩音は認めるのが怖かった。だから、千々に乱れる心を持って余したまま、ただ涙を流していた。

また明日。そう云ってくれた彼の言葉を、たったひとつの抛り所として。

\*

月曜日の朝は誰にとっても気が重いものだが、今日の詩音にとつては格別だった。足を引きずるようにして、学校までの上り坂を歩いていく。

一人きりだった。あまりつきまとは、と考えているのか、信も朝は詩音を待ってはいない。

だけど、今日だけはいてくれるのではないか。そんな自分勝手な期待をしている自分が詩音には腹立たしく、そして、

やはり駅に彼の姿がないことを確認して落胆している自分が、心底情けなかった。

どうしてこんなことになってしまったのだろう。昨晚から何度も重ねた繰り返しに、詩音は最近ではすっかり癖のようになってしまったため息をついた。しかし、ちょうどそのタイミングで後ろから肩を叩かれ、危うく飛び上がりそうになってしまった。

「よ、おはよ」

「あ……」

我知らずこぼれる笑顔で、詩音は振り返る。だが、そこに立っていたのは、彼女が逢いたいひとではなかった。

「三上くん……、唯笑さん……」

「よ」

「おっはよー、詩音ちゃん」

幼馴染みから、晴れて恋人同士に昇格を果たした、三上智也と今坂唯笑。その二人が、今日も並んで登校していた。これまでなら、そうした二人の姿に小さな痛みを感じていたはずだが、今の詩音はただ失望に顔を曇らせるだけだった。

「あれ？ どうしたの、詩音ちゃん、元氣ないよ」

詩音の変化に気づいた唯笑が、眉を寄せて、詩音の顔を覗き込んでくる。詩音は慌てて首を振り、顔を背けた。

「な、なんでもありません」

「そう？ 具合悪いとかじゃないの？ 大丈夫？」

「はい」

「うーん……」

「月曜の朝なんて、みんなユツなもんだろ。いつでも元氣なのは唯笑ぐらだよ」

どうしても詩音の態度が気になってしょうがない様子の唯笑の頭を、智也がぼんと叩いて引き留めた。唯笑はたちまちむくれて、智也の顔を軽く睨みつけた。

「なあに、それ。唯笑だって色々悩み事もあるんだから」

「はいはい。どうせ今日のお弁当の中身は何かなあとか、そんな悩みだろ」

「ひっどーい」

逃げるように小走りに歩く智也の背を叩きながら、唯笑があとを追った。

詩音は二人の後ろ姿を眺めながら、ほっと軽く息をつく。さりげなく話をそらしてくれた智也の気遣いがありがたかった。

智也はいつも、こちらの気持ちに強引に踏み込んでこようとはしない。信ならきくと、唯笑と一緒に大袈裟に心配してくれるだろう。

そこまで考えて、詩音はまた表情を暗くした。

何を比べているのだろう、私は。こんな浅ましさが、自分の中にあるなんて。

大きくかぶりを振って、詩音はそれ以上考えるのをやめようとした。そして、歩き出そうと顔を上げたとき、智也と唯笑が立ち止まって、心配そうに振り返っているのに気づいた。

「あ……」

詩音はバツが悪そうに、少し頬を赤らめた。けれど、二人はもう何も訊かず、ただ微笑んでいた。

「早く行こ、詩音ちゃん」

「は、はい」

足を速めて、詩音は二人の背に追いついた。

\*

始業ベルギリギリに駆け込んできた信は、いつもと変わらない笑顔で、隣の席の詩音に挨拶をした。

「おはよ、詩音ちゃん」

「……おはようございます」

目をそらしたり、うつむいてしまったりしないようにしよう、そう意識しすぎるあまり、詩音は思わずじっと信の顔

を見つめてしまった。そのため、不思議そうに信に首を傾げられ、結局赤くなって目をそらしてしまった。

それから、当たり前前一日が過ぎていった。しかし、詩音にとつては、いつになく長い一日となった。

はじめの頃と違い、信は詩音に必要以上に話しかけなくなっていた。詩音が静かに過ごす時間を邪魔しないよう、気を遣うだけの余裕が出てきたのだろう。だが、今日に限っては、その彼の気遣いが詩音を居心地悪くさせていた。

ようやく、最後の授業の終了を知らせるベルが鳴った。ホールルームが終わると、詩音は信が席を立つ前に、急いで声をかけた。

「……稲穂さん」

「ん？ ああ、またあとでね」

いつも通り詩音が図書室に向かうのだと信じて疑わない信は、笑顔で詩音に軽く手を振って見せた。詩音はつい頷いてしまふようになるのを必死で押しとどめて、言葉を紡ぎ出した。

「いえ、その……」

「？」

「今日は……もう、帰りませんか？」

「え？ 図書室はいいの？」

「はい、今週は委員ではありませんから……」

「そっか。こんなに早く一緒に出られるなんて、ラッキーだな」

相変わらず屈託のない信の喜び方に、詩音のほうも照れてしまう。けれど、やはり詩音もそう云ってもらえると嬉しかった。

とにかく一刻も早く、昨日の態度について謝っておきたかったのだ。いつでも何もかも彼の優しさに甘えて、それでうやむやにしてしまうようでは、詩音は自分が許せなかった。

しかし、残念ながら、非常に間が悪かったようだ。一度図書室に行ってから、引き返せばよかった、と詩音は後悔した。

「あれ、今日はもう帰るの？」

二人で教室を出ようとしたとき、唯笑に声をかけられてしまったのだ。

振り向くと、智也と唯笑も帰るところだった。唯笑は本当に嬉しそうに満面の笑顔で、詩音に腕を絡めてきた。

「わあい。じゃあさ、せっかくだから、久しぶりに四人で遊んで帰ろうよ」

「お、唯笑にしては名案だな」

「ひどーい。じゃあ、智ちゃんだけ来なくていいよーだ」

二人にしてみれば、今朝の詩音の様子を心配して、元気づけようとしてくれたのかも知れない。そう考えたから、詩音は彼らには気づかれないように、そっと吐息を漏らした。

「ちえっ、気が利かねえなあ、二人とも」

信も冗談めかして答えているが、断る気はないようだった。

今でも彼は、私が彼と二人きりであるより、唯笑さんたちと四人でいるほうが気が楽だと思っているのだろうか。

詩音はまたしてもそんなことを考えてしまふ自分に舌打ちしつつ、教室を出た。

\*

最初にそのひとに気づいたのは、唯笑だった。

「あれ？ よその学校の子がいるよ」

昇降口を出て、校庭を横切って校門へ向かおうとしている途中だった。

その門のところ、明らかに澄空とは違う制服を着た少女が、立っていた。

唯笑の言葉でそちらを見やっった詩音と信は、同時に、表情を凍り付かせた。

気位の高い猫を連想させる、その美貌。豊かで艶やかなその黒髪。そして、その制服。

「あれ、浜咲のだよ。誰か友達待ってるのかな？」

まさか彼女の待っている人物が、今、自分の隣にいる男だとは、唯笑には想像もつかない。

しかし、彼女、藤村真冬が待っていたのは、信だけではなかった。

歩みを止めるわけにもいかず、校門へ近づいていく四人に、真冬も気づいた。信の顔を見て、ニツ、と唇の端だけで笑う。そうすると、ますます猫を思わせる表情になった。

真冬が信へ送る視線に、智也と唯笑も気がついた。硬い表情の信と、謎の美少女の顔を唯笑が交互に見る。

「ほえ？　もしかして、信くんのお友達？」

「……………」

答えず、信は少し足を速めて、真冬の前に立った。詩音はひどい胸騒ぎを感じながら、その背中を見守った。

「……………何しに来た」

「…挨拶ね」

真冬は芝居がかった仕草で肩をすくめて見せた。そして、ひどく挑戦的な眼差しを、まっすぐ信に向けた。

「でも、お生憎様。今日はあなたに会いに来たんじゃないの」

「なんだって？」

「私がお用があるのは、そちらの二人よ」

真冬が差したのは、突然生じた険悪な雰囲気、茫然と彼女らを見守っていた智也と唯笑だった。当の二人が、そしてそれ以上に信と詩音が驚いて目を瞪る。

「お前……………何を？」

「はじめまして。藤村真冬です。あなたたちが、三上智也君と今坂唯笑さんね？」

信の狼狽を完璧に無視して、真冬は智也たちの前に立った。唯笑が少し怯えたように、智也の袖を掴む。智也はそっとその手を包み、真冬の挑むような視線を見つめ返した。

「そうだけど。君は信の友達？」

「恋人よ」

「なっ……………！」

目をむいた信が、思わず真冬の肩を掴んだ。真冬は信を振り返りもせず、うるさそうにその腕を払った。

詩音は青ざめて、目を背けるばかりだった。

「うそつ。信くんが好きなのは、だって……………」

思わず言い募ろうとする唯笑を、真冬がキツと睨む。唯笑は口を閉ざして、智也の袖を握る力を強めた。

真冬は智也に視線を戻し、挑発的な口調で続けた。

「あなたは信の、親友、なんですってね」

「……………そのつもりだよ」

「ふうん」

肩に掛かる長い黒髪を、真冬がうつつうしげにかき上げる。一拍の間。そして。

「信はずっと、あなたをだましているの？」

「……………！」

「……………なんだって……………？」

信は青ざめて、棒立ちになっていた。真冬を止めることもできない。

詩音もまた、体が震えて、声が出なかった。

やめて。何を云う気なの。もうやめて。

「彩花さん、だったわよね。あなたの昔の恋人」

「……………！」

「彼女は、信をかばって、事故に遭ったのよ」

詩音は目の前がすっと暗くなっていくのを感じた。足に力が入らなくて、倒れそうになる。

信は目を閉じ、唇を噛んで、天を仰いでいた。

そして、智也と唯笑は、真冬の言葉の意味が、よくわからなかった。わかりたく、なかった。

「な……………ん、だっ……………て？」

「……………智ちゃん……………」

「信のせいで、あなたの恋人は死んだの」

残酷な言葉を、何のためらいもなく口にする真冬。その口

に浮かぶ笑みは、魔性のもののようにさえ、詩音には思えた。

「その償いがしたくて、信はあなたに近づいたの。でも、その償いが新しい彼女との仲を取り持つことだなんて……笑っちゃうわよね」

信が動くのが一瞬遅ければ、詩音が真冬の頬を張っていただろう。

信は真冬の胸ぐらを掴み、右手を振り上げた。けれど。

「信……」

親友の、小さな呟き。そのたった一言が、信の動きを止めた。

ゆっくり、ゆっくり、信が振り向く。怯えた子犬のように、細かく震えながら。

智也は、うつむいていた。そのために、その表情は信にはわからなかった。

「信……どうして……」

そこから先を聞く勇氣が、信にはなかった。彼は真冬を放すと、皆に背を向けて走り去った。

「稲穂さん……!!」

とっさに追いかけてようとしたとき、詩音は気づいた。燃えるような、激しい視線に。

真冬が、まるでその視線で射殺そうとするように、詩音を睨みつけていた。

このとき、初めて真冬と目が合ったことに、詩音は気づいた。昨日も、そして今日も、真冬は詩音などまるでそこいないかのように振る舞い続けていたのだ。

だがそれも一瞬のことで、真冬は冷笑を浮かべると、信が去ったのとは反対の方向に歩き出した。

智也はうつむいたまま拳を震わせ、唯笑は涙を瞳に浮かべて、智也に寄り添っている。

詩音は逡巡の末、走り出した。真冬を追って。

\*

「待って……待ってください」

詩音の呼びかけを、はじめ、真冬は無視した。しかし、腕を掴まれるとようやく足を止め、振り返った。乱暴に詩音の手を振り払い、詩音を睨む。先ほど一瞬見せた切るような視線ではなく、氷のように冷ややかな瞳で。

詩音はだが、その迫力に気圧されはしなかった。彼女もまた、生まれてこの方、ほとんど抱いたことのないほどの怒りに突き動かされていたからだ。

「どうして……!!」

「……」

「どうして……あんなことを云ったんですか!! 稲穂さんが、いつたい、これまで、どんな気持ちで……」

慣れない激しい感情に、詩音は言葉を詰まらせた。涙がにじんでてしまふ。

しかしそれでも、真冬は全く表情を変えなかった。氷の視線で詩音をしばし見つめ、そして一言、吐き捨てるように、云った。

「あなたは……彼の何なの？」

「え……」

その言葉に、詩音の激情は水をかけられたように冷えていった。

狼狽し、視線をさまよわせる詩音。そんな彼女に、真冬はこれ以上話す価値もない、というように冷笑して見せた。

「私は信を愛してる。彼を取り戻すためなら、何だってするわ」

苛烈な宣告を残し、真冬は詩音に背を向けて歩き去った。詩音はもう追うことはできなかった。ただ真冬言葉が、

頭の中でずっと繰り返されていた。

アナタハカレノナンナノ？  
アナタハカレノナンナノ？

Can You Keep A Secret ?

アナタハカレノ…  
耐えられず、詩音は膝から崩れ落ちた。真冬の言葉に心を  
抉られ、自分が涙を流していることにさえ、気づいていな  
かった。

## 第六話 願い

率直に云って、詩音が学校の授業に身を入れることはほとんどない。

そんな暇があれば、読書に勤しんだほうが有益、と本気で考えている彼女は、ある意味、外見にそぐわず問題児であつたかも知れない。

今日もまた、詩音は教師の熱弁を聞き流していた。

だが、本を読んでいるわけではない。ただぼんやりと、隣の席を眺めていた。

信がいるはずのその席は、今日で三日間、空いたままということになる。詩音はもうため息をつく気にもならなかつた。

真冬の突然の告発以来、信は学校に出てこない。

無理もない、とは詩音も思う。あんな最悪な形で智也に真相が明らかにされて、どんな顔で会えばいいのか。事情を知る身として、どうしてあるとき真冬を止めるなり、信をフオロするなりできなかったのだろうか、歯噛みする思いだつた。

しかし、自分をこんな沈んだ気持ちにさせる本当の理由は別にあることを、さすがに詩音も自覚していた。

あれ以来、信は詩音に全く連絡を寄越していないのだ。

自分に何ができるわけでもないけれど、本当に苦しいとき、頼りにしてもらえない。そのことは、否応なく詩音に、真冬の言葉を思い出させた。

(あなたは……彼の何なの?)

本当に、何だったのだろうか。彼に優しくされて思い上がつていた私は、肝心なときに何の役にも立たず、そしてこのまま、彼を失っていくのだろうか。

詩音は目を強く閉じて、涙がにじむのをこらえた。

物思いに深く沈む彼女は、その空いた席を自分と同じよう

に見つめる二つの視線に、気づいていなかった。

\*

ホームルームが終わり、帰り支度をした生徒たちが次々に立ち上がった。

詩音もまた、ゆっくりとした動作で、鞆を持って立ち上がる。しかし、どこへ足を向ければいいのかわからず、途方に暮れた。

図書室にいれば、彼が来てくれるかも知れない。帰り際、昇降口で待っていてくれるかも知れない。

そんな期待をするのにも、疲れてしまった。

立ち尽くしたまま、詩音は信の席をじっと見つめた。しかし、再びにじみそうになった涙をこらえるため、すぐに詩音は目をそらした。そして、鞆を掴んで出ていこうとしたとき、後ろから声をかけられた。

「詩音ちゃん」

「……はい？」

振り向くと、少し困ったような顔をした唯笑が立っていた。その横には、やはりどんな表情をすればいいのかわからない、という風情の智也がいた。

この三日間、詩音は彼らを避けてきたし、彼らもまた詩音に話しかけようとはしなかった。同じ人物のことを考えていたにも関わらず。

智也たちがどれだけ傷ついたかと思うと、詩音には云うべき言葉もなかった。あのとき、自分が余計なことをせず、信自ら本当のことを告げていれば、こんなことにはならなかつたかもしれない。すべての咎が自分にあるように、詩音には思えてしまう。

だから、彼らと目を合わすこともできず、詩音はうつむいて硬い表情を作っていた。

「……何か、ご用でしょうか」

「うん、その……」

「話があるんだ」

切り出し方に迷う唯笑を押さえて、智也が意外なほどきっぱりした口調で云った。

詩音は思わず顔を上げて、智也を見た。何かを決意したその表情は、詩音を落ち着かなくさせた。

「信のことで、話がしたい。つきあってくれ」

「……はい……」

強い視線から、思わず詩音は目をそらしてしまう。けれど詩音には、顔くしかなかった。

\*

人に邪魔されず静かに話せる場所で、ということ、三人は図書室に来ていた。

沈黙したまま向かい合っていると、さっきカップを借りに購入へ行ったときの小夜美の言葉が思い出された。

(どうしたの？ 三人でこれからお通夜にでも行くみたいよ) ため息をこらえつつ、詩音は借りてきたカップに紅茶を注いで、智也と唯笑に差し出した。

「ありがと、詩音ちゃん」

一言礼を云って、唯笑がカップに口をつける。そしてすぐ、花のような笑顔を浮かべた。

「おいしい。やっぱり詩音ちゃんの紅茶がいちばんだね」

「ありがと」「ごいませす」

そんな何気ない一言にも、信を思い出して、詩音の心は痛んだ。

安心できると云ってくれた、私の紅茶。だけど、彼が今、必要としているのは、私ではない……。

「双海は、さ」

「は……はいっ？」

ひとりの考えに沈みかけたところでふいに声をかけられ、思わず詩音はあくまで詩音にしてはだが大きな声を出してしまった。智也と唯笑に目を丸くされ、顔を真っ赤にして周囲を伺う。幸い、図書室にはもう誰もいなかった。

「そんな詩音ちゃん見るの、初めてだねえ」

唯笑が少しからかうように笑う。けれどすぐ真顔になって、少し悲しそうな色を瞳に映した。

「信くんのこと、心配なんだよね」

「私は……」

「双海のところにも、連絡はないのか？」

思わず言い訳しそうになる詩音を遮って、智也が話を切り出した。詩音は何も云わず、ただこくと頷いた。

「……たたく、どこ行ってんだ、あいつは……」

智也が天を仰いで、嘆息する。唯笑も肩を落としてため息をついた。

「家に電話しても出ないし……というか、どうも家にいないようなんだよね……」

「え……？」

詩音が面を上げると、智也は頷いて見せた。唯笑が身を乗り出してくる。

「そうなの。昨日、一緒に信くんの家、行ってみたんだけどねえ、会わせてもらえなくて。そのとき、なーんか、変だったんだよね、お家の人の様子が」

「稲穂さんの……？」

詩音が目を何度か瞬かせる。その様子から、智也は、詩音の驚いていることが、信が家にいないことだけではないということに気づいた。

「俺が信の家に行ったら、なんか変かい？」

「そっじゃありませんけど……でも……」

「じゃあ、稲穂さんのことを、どう考えているのですか？」



そう聞きたかったが、詩音は口にするのができなかった。

智也もそれ以上は追求しなかった。腕組みをしてしばし考え込み、そして唐突に立ち上がった。

「よしっ」

「何々？ 心当たりでも見つかった？」

唯笑が目を輝かして智也を見上げる。詩音もつい期待してしまった。

だが、智也は肩をすくめるだけだった。

「いや、全然」

「もう、なによ、期待させて」

「でも、こうしてたってしょうがないだろ。あいつが行きそうなど、探してみようぜ」

「うん、そうだね」

唯笑も靴を持って立ち上がった。二人はそのまま図書室を出ようとして、ふと立ち止まって振り返った。

「何してんだ、双海？」

「……え……？」

詩音は座ったまま、紅茶のカップをじっと見つめていた。呼びかけられ、意外そうに顔を上げる。

「一緒に探しに行くんですよ？」

なんの疑いもない様子で、唯笑はそう云った。

詩音はまた意外そうに、目を瞬かせる。

自分にできることなんてあるのだろうか。詩音はずっとそう考えていた。彼らのように、すぐ行動できることがうらやましかった。だけど。

「ほら、早く行こ。日が暮れちゃうよ」

唯笑が詩音の手を取って引っ張る。

「あ、ま、待ってください、カップを片づけないと……」

立ち上がりつつ、詩音は答えた。できることは、必ずある。そんな当たり前のことに驚きながら。

\*

「……とは云ったものの……」

「いないねえ」

「……」

公園のベンチに三人は並んで腰掛け、同じようにため息をついた。

すでに日は沈みかかり、夕焼けというより、薄闇が迫っている。

コンビニで買った紙コップに紅茶を入れて、詩音は智也と唯笑に渡した。

「サンキュ」

「ありがとう」

沈黙を紛らわすように、三人で紅茶を飲む。けれどやはり飲み終えたあとには、ため息しか出てこなかった。

信が行きそうなゲーセン、本屋、喫茶店など、町中のあちこちを回ってみた。しかし、どこにも信の影はなかったのだ。

「まったく、人騒がせな男だよな」

空になった紙コップを握りつぶし、智也が立ち上がって背伸びをした。唯笑と詩音のほうを振り返る。

「もう遅いからさ、二人は帰れよ。俺はもうちょっと探してみよう」

「唯笑だつて、まだ大丈夫だよ」

「私も……」

「そうは云ってまき……」

云いながら首を巡らした智也の目が、何かを見つけたように大きく見開かれた。

まさか信が、と思って詩音と唯笑もその視線をたどる。

しかし、そこにいたのは、黒髪の美しい少女だった。

詩音は我知らず、息を飲んだ。

「あれ……もしかして……」

唯笑も驚いて、言葉を詰まらせる。智也がやや険しい顔で、頷いた。

「ああ、彼女……藤村真冬、だっけか」

真冬のほうは、智也たちに気づいていない。しゃがみ込んで、猫を構っているようだった。

辺りは薄暗かった。その表情がはつきり見えた訳ではなかったが、三日前、校門で会ったときとは別人のように柔らかい顔をしているのは確かだった。まるで子供のような笑顔だったのだ。詩音たち三人は、そのギャップに驚いて、しばらく言葉もなく真冬を見つめていた。

「彼女なら……知ってるかもしれないな」

智也の呟きに、詩音の体はびくっと震えた。胸が熱くなる。今は信の行方を知ることが何より大事なはずなのに、真冬からそれを聞かされることには、耐えられそうになかった。

だが智也は、一步一步真冬に近づいていった。

真冬と遊んでいた猫が、智也の気配を感じて、走って逃げていく。

「あ……」

ふいに逃げ去った猫を、真冬は淋しそうに見送った。詩音の間違いでなければ、一瞬、泣きそうな表情さえしていたかもしれない。

しかし、近づいた人影が智也だと、そしてその後ろに立つ唯笑と詩音に気づくと、真冬はたちまち氷の表情を取り戻した。意外な面を見られてしまった、という動揺さえ表さない。

「あら、奇遇ね、こんなところで」

立ち上がりながら、長い髪を後ろにかき上げる。傲慢なほど艶やかな仕草。さっきまで猫と戯れていた少女と、どちらが演技なのかわからないほどに。

「この間はどうも」

挑発的な態度に、しかし、智也は乗せられなかった。無表情なぐらいの静けさで、用件だけを切り出した。

「信がどこにいるか、知らないか？」

「……」

真冬がまっすぐに、智也を見つめる。探るような、挑むような視線。

詩音と唯笑は、息を飲んで二人を見守った。

「知っていても、教えると思う？」

「知っているなら、どんな手を使ってでも聞き出す」

激しくぶつかり合う視線。

この二人は本当に稲穂さんのことを大切に思っている。理由もなく、詩音にはそう直感できた。

「信を見つけてどうするの？ 復讐でもしようとも？」

「これだけ面倒かけられたんだ。一発ぐらい殴ってもいいかな」

肩をすくめて、智也が冗談交じりに答える。だがすぐに真顔に戻った。

「ダチがいなくなれば、探すだろ。なんか不思議か？」

それはさつき図書室で詩音が聞いたのと、同じ台詞だった。真冬は苛立たしげに、唇を噛んだ。

「どうして……！ 信が憎くないの？ 信のせいで、あなたの恋人は死んだのよ？」

「信のせいじゃない」

「そんなの……」

「それに」

なお言い募ろうとする真冬を、智也は静かに遮った。彼は激してもいかなかったし、口調も至って穏やかだったが、何か不思議な迫力があって、真冬を沈黙させた。

「たとえそうであっても、俺は信を探す。信は俺にとって、かけがえのない親友だ」

「……！」

拳を握りしめて、真冬は智也を睨んだ。智也は静かにその視線を受け止めている。

やがて真冬のほうから目をそらした。固く唇をひき結ぶその横顔に、智也は言葉を続けた。

「あんたが、そうやって信を探してるようにだ」  
「なっ……」

真冬が初めて、動揺を露わにした。智也を睨もうとするが、その視線を受け止めることができず、またすぐに横を向く。氷の仮面が、はがれ落ちようとしていた。

「あんたが、何を失っても、信を取り戻したいと思うのはわかる。だけど、俺たちだって同じだ。それはわかってくれ」  
真冬はもう答ええない。唇を噛みしめて、肩を震わせていた。

そんな真冬に唯笑が近づき、そっと肩に手を置いた。真冬は振り払いもせず、目を背けるだけだった。

「ほんとは、わかってるんだよね」  
「……」  
「信くんが、好きになったひとだもん。わからないはず、ないよ。ね」

いつの間にか日は完全に沈み、公園の街灯が灯されていた。弱々しい光に照らされて、真冬の頬を涙が一雫だけ、伝った。

「……バカなんじゃないの、あんたたちって」

詩音たちに背を向けて、真冬はそう呟いた。そのまま数歩歩き、背を向けたままで、小さな声で云った。

「信が見つかったら教えて。お願い」  
「お互いにな」

真冬はかすかに頷いたようだった。そのまま振り返らずに歩き去る後ろ姿を、三人は黙ったまま見送った。

「……未だ手がかりはなし、か」

智也が手を頭の後ろで組み、大きく息を漏らす。  
「だねえ」

唯笑も相づちを打ちつつ、ため息をついた。

「やっぱ、もう一回、信の家に行ってみるか……ん？」  
云いながら詩音のほうに振り向き、智也は驚いて言葉を失った。唯笑も気づいて後ろを向き、目を睜がった。

「ど、どうしたの、詩音ちゃん？」

「……え？」

詩音は意外そうに、首を傾げる。唯笑が心配そうに眉をひそめて、云った。

「泣いてるよ……？」

「え……？」

詩音は手をあげて、自分の頬に触れてみた。しめった感触に、自分で驚く。

「え？ え？」

止めどなく涙が流れる。唯笑が詩音に駆け寄り、ハンカチを当てて涙をぬぐった。

「大丈夫？ どうしたの？」

「わかりません……ただ……」

「ただ……？」

ただ……なんだろう。詩音は考えた。

感動は、していた。智也の信を思う友情に。真冬の信への愛情の深さに。

「ただ、それだけではなかった。そう、私は」

「うらやましかったから……」

「うらやましい……？」

唯笑が怪訝そうに繰り返して、智也の顔を見上げる。智也も不思議そうに首をひねった。

そうしている間も、詩音の涙は止まらなかった。

あんなに真っ直ぐに、誰かを大切に思うこと。人を傷つけても、自分がどれだけ苦しい想いをして、それでも見失わない、大切な何か。

それをひたむきに信じていることが、いつから、どうして、私はできなくなっただろう。

怖い？ 何が？ どうして？

いつの間にか、詩音は唯笑に抱きしめられ、その胸の中で泣きじゃくっていた。唯笑は詩音の髪を優しく撫でながら、囁いた。

「詩音ちゃんがうらやましく思うものなんて、唯笑たち、何も持っていないよ?」

詩音が激しく、かぶりを振る。唯笑はいつそう優しい仕事で、詩音の髪を撫で続けた。

「ほんとだよ。唯笑たちが持つてるものは……詩音ちゃんも、同じように持つてるものだから……」

「……え……?」

涙に濡れた顔を、詩音が上げる。笑顔の唯笑と智也。そこにある、かけがえのないもの。

「信くんのこと、大事に思ってるでしょ?」

「……」

「唯笑たちのことも、だよな? 自惚れかな?」

「唯笑さん……」

「ま、ちよっとランクは落ちるかもな」

「うーん、まあ、それはしょうがないかあ」

「私……私は……」

屈託なく笑う智也と唯笑に、何も考えず、笑顔を返すことができたなら。きっと、彼らの云うことを信じられるだろう。

それでもまだ自分への言い訳を考えていることに、詩音は絶望したくなった。ただ今、自分を包んでくれているこの暖かさ、それだけが唯一の希望に思えた。

「……さて、これからどうしようかな」

「信くんの家に行く?」

「そうだなあ……」

顎に手を当てて考え込んだ智也は、しばらくして、何かを思いだしたように顔を上げた。

「搦め手からいくか……」

「ほえ?」

「……?」

\*

古びたアパートの門の側で、信は突然足下にまとわりついてきた犬に驚かされた。門には「朝風荘」と書かれている。

「うわっ、なんだよ、お前。どっから来たんだ?」

もちろんだ、犬が答えるはずがない。ただ嬉しそうに足にじやれつく犬を抱え上げ、信は笑った。

「なんだ、お前もここが気に入って住みたいのか? しょうがねえ、じゃあ、俺から家主に話つけてやるよ」

やはり嬉しそうに、犬がワンワンと吠える。信は犬を下ろし、自分もしゃがみ込んで腹を撫でてやった。

「じゃあ、名前がいるな。……トモヤってのはどうだ? 頭悪

そうな名前だけだな」

「誰が頭悪そうな名前だつて?」

「えっ……」

驚いて信が振り向くと、そこには智也が立っていた。後ろには詩音と唯笑もいる。

「智也……詩音ちゃん……なんで……」

「とりあえず、一発殴らせろ」

茫然と立ち上がる信に近づき、そう云った瞬間には、智也の拳が信の頬をとらえていた。思わず詩音と唯笑が目をつぶる。

信はよろけつつ、何とか転ばずに踏みとどまった。犬が驚いて、智也に向かって吠えたてる。

「お前ら……なんで、ここが……?」

「なんで、はこつちが聞きたいことだけだな」

「お姉さんに教えてもらったんだよ」

唯笑が智也の背中から顔を出しながら、笑顔を見せる。信は唇ににじんだ血をぬぐいながら、しかめ面を作った。

「……あのおしゃべりが……」

あれから、詩音たちは信の姉がバイトをしている喫茶店に行き、事情を説明した。信の姉は、とりあえず状況が落ち着くまでは内緒にしとこうって話だったんだよね、と前置

きして、信が家を出たことを教えてくれたのだった。

「で、お前はどいうつもりなんだ？ 突然、家を出る、学校もやめるなんて云いだして、家のほうでも頭抱えてるそじゃないか」

「……」

信は目をそらしたきり、答えはない。智也は信の胸ぐらを掴み、無理矢理自分のほうへ向かせた。

「智ちゃん、あんまり乱暴なことは……」

唯笑がたまらず止めようとするが、智也は腕の力を緩めはしなかった。

「俺に合わせる顔がない、なんて理由だったら、もう一回殴るぞ」

信が顔を上げて、智也の目を見つめる。互いに睨むような視線を交わしたあと、信は小さく、笑った。

その笑みは、場を誤魔化そうとするのではなく、泣き出しそうなのをこらえているように、詩音には思えた。

「お前って、こんな熱血バ力だったか？」

「時と場合によるんだよ」

ようやく、智也が信から手を放した。信は胸元を引っ張って服を直しながら、もう一度笑った。

「お前がそんなだから、だよ」

「……？」

「ひとりに、なりたかったんだ。ならなきゃいけないと、思った」

「信くん……？」

信は首を巡らして、智也と、唯笑と、そして詩音を順に見つめた。詩音は信と目が合うと、頬が熱くなるのを感じた。そのことに気づいているのか、信はいつものように、優しく微笑んだ。

「償いを、したかった。そう思ってた。だけど、俺は……逃げただけだ。ずっと」

「信……」

「あの事故の場所から逃げ、真冬から逃げ……、償いをしたなんて云って、結局、智也や唯笑ちゃんの優しさに、俺のほうで救われただけだった。そして、今度は詩音ちゃんに……」

「稲穂……さん……」

「今度のことも、きっと智也なら許してくれるだろう。そう思った。だけど、それじゃダメなんだ。お前たちに甘えているだけじゃ、俺はもう自分が許せない。ひとりになって、自分に何ができるのか、何がしたいのか、考えてみたい。そう思ったんだ」

沈黙が降りる。

「だからって、姿を消すことはないだろう。水くさいんだよ、バカやろう。智也はそう思った。」

唯笑たちだって、信くんの優しさに救われてきたの。今こうしていられるのは、信くんのおかげなんだよ。唯笑はそう云いたかった。

けれど、沈黙を破ったのは、静かな、低い声だった。

「そんなの……勝手にです……」

「え……？」

「双海？」

「詩音ちゃん……？」

三人の視線が、詩音に集まる。詩音は震える肩を自分自身で抱いて、うつむいたまま、言葉を詰まらせていた。

「そんな……何もかもひとりで決めてしまっ……、それなら、私の……私は……！」

詩音が顔を上げて、まっすぐ信を見つめた。涙に濡れたその瞳を、紅潮した頬を、信は初めて見る想いで見つめ返した。必死で何かを伝えようとするその姿には、真冬の凄絶さに劣らない、ひたむきな美しさがあった、

「私の……私の気持ちは……！」

もうそれ以上は、言葉にならない。

同じく何も云えず立ち尽くす信の背を、智也が思いつき叩いた。

「よっ」  
 よろけながら振り向いた信に、智也が不器用にウィンクをして見せる。苦笑しつつ、信は詩音に近づいていった。そっと手を伸ばして、頬に触れようとした、そのとき。

信の動きが、止まった。  
 怪訝に思った智也がその視線をたどり、息を飲む。振り返った詩音と唯笑も。  
 真冬が、立っていた。

\*

会うたびに、真冬の印象は変わる。詩音はふとそう考えた。炎のように激しく、氷のように冷たく、子供のように無邪

気で、そして今は。夢のように、はかなかった。

もちろん、きつい面差しや、強い意志を秘めた瞳の色に変化はない。それでも、どこか心細げに立っているように、詩音には思えた。

「真冬……」  
 信が真冬に向かって、一歩足を踏み出す。

「俺は……」  
 「待って」

真冬が手を挙げて、信を制した。固く結んだ唇が、やはり痛々しく詩音には見える。

「一人で……うっん、三人で話をさせて」  
 そう云って、真冬は詩音を見た。今度は、刺すような視線ではなかった。

智也が信のほうに目を向ける。信が頷くと、智也も頷き返して、唯笑を促して歩き出した。

「あとでレポート出せよ」  
 軽口を叩く智也に、信は手を軽く振って答えた。

残された三人はしばらく黙っていたが、やがて真冬が、やはり猫のように微笑んだ。

「話は、聞かせてもらっちゃった」  
 「そうか」

「……あなた、やっぱり勝手よ。全然変わってない」  
 信は少し困ったように、眉をひそめた。真冬はその顔をじつと見つめる。切れ長の瞳に、涙が浮かんできた。

「なんでも、自分で勝手に決めちゃって……、なんでも……自分のせいだって抱え込んで……、バカなんじゃないの……？」

「……？」  
 「そっかもな」

信が苦笑する。真冬も目に涙を浮かべたまま、微笑んだ。詩音は真冬の本当の笑顔を、初めて見た。その瞬間、信が彼女を愛した理由が、わかったような気がした。

そしてそれは、不思議と苦い気持ちではなかった。

「双海さん、だっけ」

真冬が詩音のほうに向き直り、云った。静かなその視線を、詩音もまた穏やかに受け止めた。

「はい」

「もう一回訊くけど……あなたは、信のなんなの？」  
 「私は……」

詩音は、信の顔を見た。信は戸惑ったような表情をしている。  
 詩音は微笑んで、真冬に視線を戻した。

「わかりません」

「……」  
 「だけど、私にとって、稲穂さんは大切なひとです。それは、わかります」

「詩音ちゃん……」  
 「……そう」

もう一度微笑むと、真冬は踵を返した。そして門のところまで立ち止まり、振り向かずにはいた。

「私、諦めないから」

「真冬……」

「油断しないことね」

その言葉を最後に、真冬は歩き去った。一度も振り返らず、凜と背筋を伸ばして。

「素敵なひとですね」

正直な気持ちで、詩音はそう呟いた。そして、少し悲しそうに頷いた信の手を、そっと握った。

「詩音ちゃん……？」

詩音は答えず、ただじっと信の顔を見つめた。

傷つくのが、怖かった。ひとりであることに、安心さえしていた。孤独なんて、裏切られることに比べれば、遙かに受け入れやすいものだった。

だけど。この手にあるぬくもり。胸を熱くさせる何か。それを失うことよりも、怖いことがあるだろうか。

微笑む詩音の頬を、また涙が伝う。信は手を伸ばして、その雫をぬぐった。

「稲穂さん……」

「なに……？」

「お話したいことがあります……。あなたに聞いてほしいこと……。たくさん……。」

「……うん」

信が笑顔で頷く。詩音の大好きな、その笑顔で。

詩音は微笑んで、そっと、目を閉じた。

Memories Off  
Scenario for  
Shin & Shion  
"Can You Keep A Secret ?"  
end

## PDF版あとがき

きっかけは、掲示板で出た「唯笑」のときの信の台詞は大げさだよ〜という話題でした。自分のせいで彩花が事故にあったならともかく……という発言をしたあと、そういう設定で話作れないかな？と考えたのです。ちょうどその頃、小説版メモオフを読んで、信は詩音に気がある設定になっていたので、詩音と絡めてみようかなと。

それで「つぐない」を作った訳ですが、書いてみると、意外とこのカップル面白い(笑)。なので、速攻その日に続編「告白」を作成。さらに、当時、まだかおるをちゃんと書いたことがなかったのと、またまたちょうどドラマCDを聴いて、かおるが詩音と転校生同士仲良くしたいと云っていたので、じゃあその二人絡めてみるか、というのでできたのが「笑顔」。それでもって、信の側の気持ちも書いてみようというのと、またまたまたちょうどかおるのマキシシングルのミニドラマを聴いて、小夜美ねーさんはほんとと頭いいんだぜ、という話を書きたくて、できあがったのが「気持」です。どうでもいい話ですが、この「気持」はタイトルにめちゃくちゃ悩みました(笑)。全部日本語一言のタイトルにしよう！と思っていたのはいいんですが、なかなかいいのがなくて。結局、作品のテーマから「気持」にしたんですが、イマイチだなあと今でも思っています。

で、ここまでは一応連作読み物って感じではありましたが、明確なシリーズではありませんでした。ちゃんとした結末を書きたいという意志はあったんですけど、小説版の評判を聞くと「信と詩音をくつつけるなんて！(怒)」という声が大きかったの……。一応、「笑顔」で詩音は自分の気持ちを少し意識するようになったので、そこから先は読者の想像にお任せしようかと。

それですと更新されないうままだったのですが、某所で穂波さんが「よかった」と云ってくださいましたので、俄然やる気が(笑)。尊敬する人に自分の作品を気に入ってもらえるなんて、そりゃもう天にも昇る気持ちです。これで、「よっしゃ、続き書こう！」って気になりました。

折しも、メモオフセカンドの発表で、信は高校を中退していることが判明。いったい何があったんだろう？と想像は膨らみます。さらにまたちょうど(笑)この頃、じみさんに勧めていただいた村山由佳を読みあさっていて、ああ、自分も切ないラブストーリー書きたいなあと思って。

それで、完結編を作ることになりました。だったら、ちゃんとシリーズタイトルつけなきゃな、と。そこで持ってきたのがヒッキーの「Can You Keep A Secret?」。私はこの歌は愛する人を信じたい、だけど信じるのが怖い、という心情を歌ったものだと思ってるんですが、これが詩音にぴったりだと思ったものですから。もともとは、詩音視点で詩音シナリオを語るSSにつけようと思っていました。

しかし、筋自体は早めに考えたものの、実際に作品にするのは非常に大変でした。やはり信のキャラクターが明確でなかったのが失敗でした。オリジナルキャラ化させても、もつとしっかり作り込むべきでしたね。

第五話公開時の真冬人気も、嬉しい誤算でした(笑)。その分、六話での扱いの少なさが不評でしたが……。でも、これは信と詩音の物語なので……ご勘弁ください……。

今では自分でもかなり気に入っているシリーズなので、ちゃんと完結させられてほんとによかったです。改めて、そのきっかけを与えてくれた穂波さんといじみさんに感謝させて



いただきます。ありがとうございます。  
しかし、こうやって振り返ると、ほんとに「ちよつどそのと  
き」読んだ本やCDの影響を受けてきてるんですね、この  
シリーズは。なんだか不思議です。  
感想など、いただければ幸いです。

八神大輔

初出	二〇〇一年三月一九日
つぐない	二〇〇一年三月一九日
告白	二〇〇一年三月一九日
笑顔	二〇〇一年三月二〇日
気持	二〇〇一年三月二七日
失意	二〇〇一年八月三一日
願い	二〇〇一年九月二六日